### 川物格



日川協加盟

No. 590

七月号

タカシマ 大阪・東京:京都 りす です。 お贈りす

(1)

東京・日本橋

かと存じまれたいたぶく

何

頒価 三千円 (送料二百円)

の 画 集 中島生々庵 共著



551)

アイスキャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリー

バニラ ・ ミックス ・ チョコ



《出張販売》高島屋 そごう・阪神 松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

大 阪・なんば

### ゼニの事

uning the second of the second

十年、 るか言うのです。ご尤もご尤も、ゼニをため ちょろい若者にゼニの有難た味が判ってたま 校程度、 今更感概深くゼニの事を考えたのです。 だのお手本みたいなものを身近かに見たので でもない。 なく、さりとてお金持ちが羨ましいと言うの やっと今日の地位を得たものだ。甘っ 貫で故郷を飛び出し、読み書きも小学 大阪のど真ン中できびしい修業の三 つい先日、この世は萬事、金だ金

ん」と言ったそうです。 人間らしくして居ては、 万法を尋ねたら「片足あげて小便しなさい。

金持ちにはなれませ

だま行きつ戻りつし」になりますぞ。

やがてお迎えが参りますと、 人騒がせな晩年を、

生き甲斐と信じき

「金もちの

十億貯ると

或る人が佐久間象山に

向って金持ちになる

私が金儲けが下手だからくやし

ほしいのです。一億貯ると十億、

も金の面白し るのが悪いとは申し

ません。

遣うの

10

受 け 2 to え 火 花 0 ま ま 0 子

告

篇

1

T

10

け

2

专

言

わ

ず

出

T

19

くとも言わ

す

3 10 8 な 負 け 口 下 手: 0 目 から 凉 U

会

計

È

任

たっ

カン

3

言

13

た

15

2

٤

から

言

え

笛

から

遠

0

3

冷

却

期

待

٤

す

る

中 島生々庵

# 」といった江戸川柳の心意気が

### 川柳塔七月号



のち

橘は高

薫

風

路郎先生が生前「僕の最後の友人に」と、路郎先生が生前「僕の最後の友人に」と、その出会いを楽しんでおられた時実新子さんだ。記念大会の当日には、生々庵主幹が選者た。記念大会の当日には、生々庵主幹が選者た。記念大会の当日には、生々庵主幹が選者た。記念大会の当日には、生々庵主幹が選者として出席されたのをはじめ、川柳塔の同人として出席されたのである。又、受賞の理由が、充実した作のであろう。又、受賞の理由が、充実した作のであろう。又、受賞の理由が、充実した作品により、川柳界以外の文芸のジャンルに、品により、川柳界以外の文芸のジャンルに、品により、川柳界以外の文芸のジャンルに、品により、川柳界以外の文芸のジャンルに、日本に過ぎずと、芸いようのない感慨を覚えたれに過ぎずと、云いようのない感慨を覚えたれに過ぎずと、云いようのない感慨を覚えたれに過ぎずと、云いようのない感慨を覚えたとであった。

下年、新子さんの個人誌「川柳展望」が発出された時、私が、作品で参加支援する者、刊された時、私が、作品で参加支援する者、社で助言助力を致す者、それぞれの分に応仕で助言助力を致す者、それぞれの分に応せ、新子さんを皆で盛り立てて行くべきだとじ、新子さんの個人誌「川柳展望」が発電は、新子さんの個人誌「川柳展望」が発

妻の指せめて真珠でかざりたい	から		編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一路集「折り紙」	各地柳壇(佳句地10選)本社六月句会	柳界展望	大萬川柳「驚く」	初歩教室	阪上十止庵氏逝く	雅号ぶっちゃけばなし	一分間の柳論	川柳人口	七人の曲り角	夏の風物・風鈴	盗聴器	アルファー句について
塩満					(康		Щ	本田	岩		嘉	関	中		大	直
敏	(路郎)	*	(一三夫・葉子) …	- 廣洋 定選…	崎 祥 月 選… 庸佑・整理)…		村好郎選…	_		미	代	美	晃		美	原七面山…
0		)			61 56	54	52	50	<u>47</u>	51	45	45	45	44	43	43

承しなくてはならないと思う、と云ったのだ 柳界発展のためには、先人の長所を貪欲に継

いのちや魂を培って行くのであろう。 の激しさが、すさまじくさえある。 り、具象、抽象の作品への遍歴の波のうねり た。苦労も一人であったろうことは、 うに思うと云えば鳥滸がましいであろうか。 度、その精神が、私の血に溶け込んでいるよ 竹二の作品が、そして、豆秋・香林の作句態 先人の魂を吸収して、今日の華を咲かせられ を深める努力を続けているのである。路郎や 中村富二の作品を畏敬しながら、自身の句境 は、路郎の句を慕い、大山竹二の句に惚れ、 新子さんも、三太郎をはじめ多くの偉大な これは作品にも云えることでもあ 努力が、 私と異 る。

ことに違いない。 れ出る爽快な、或いは重厚な作品を指しての 一日を真執に生きる努力、ひたすらさから生 重なって泣いた真昼の仏かな 路郎の標榜した「人間陶冶の詩」も、一日

いる。 いのち」の謂であると、現在の私は理解して 死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ 院長があかんいうてる独逸語で 門標に竹二としるすいのちかな 「いのちある句を創れ」の至言は、 路郎 「わが 豆秋



### 若 本多 久 志

選

主婦の笑顔に嘘がある 八尾市 大 路 美 幸

人生を問えば 這い上る炎恐れぬ愛もある 滝 昇る鯉の一途に 嘘はない 天を指し

三面鏡

女の悲しみ知りつくす

H

日溜りの

いている 和歌山

愛瘦

せて妻の寝息を聞

若 宮 武 雄

よい ささやかな善意 ひとに触れ て行路に悔いがない 他人の仲に活き

今日を稼ぐ軍手左右の主張ない

山

の高さ知らないままの蟻でいる

子を育てあげて里芋の親に似る

優 X 蔣 相をぼかして吉に夢を売る 一越感抱けば心が浮いて来る き忘れ種の命に 詫びきれ か

大阪市

金

井

文

秋

春の雨二浪の涙とも見える

民俗資料館 迷う道なら二人で迷わんか 箸立 口惜し涙は心に刻んでおこう ての中は差のないうどん箸 成人向きへ目を細

そんな敗北感だけ残 る 8

あ

の若さ

松江市

11 林 孤 呂

算数が数学となり寄りつけず いのある中だから酌みにくる ヘモデルは背を向 に青空が写らない けり

卑しげな眼

っ子

の瞳

腹巻で大阪弁がよく似合い

神戸市 1 浜 牧 人

老いらくのロマンは捨てぬ赤いシャ

"

空泳ぐ少年の鯉竜になれ

ワンマンも潜在的な敵を知り マンネリの証拠に過去を掘り返し 眼で見られて策を持つ男

大阪市 不二田 三夫

4

年頃のが 小 花 身の だまされ 15 淚 花 13: 椅 職 工 海 15 E ンションは淋しいところペルシ 1 東を 取ら 問 を背に 頃の娘へ父の距 ラ 子 ブ ょ を 0 0 口 開く時 の気持に 買う男 ル 0 ない 浅く掛 ロンの ズボラな男で自 0 日 恥 5 1 デンウイークごろ寝で過ごす雨 少うし遅れ 抱いても少女に戻れない ない故郷なまり 弱さ慕情を制し 弱さそっくり譲り受け ンを殺っ とこ 0 を晒らし てい 母折鶴 若 朝もいつものように起き 出けて働 よごれに 7 葉の燃ゆる詩 0 る幸福な日が続く になれと 女の は 面 す 科白 ts 0 7 をかぶっ 離 る 17 17 詩を読む 3 橋を渡り があ のち 誕生 動ドアが好 軽 朝 母 は アドバイ 兼ね い罪 友は にする 0 美 3 幸があ て逃げ Û など思う H を よし 切る 聞 ス 東広島 < 竹原市 きつ 3 倉敷市 おうせ 重県 + 0 11 III 小 高 島 1 橋 野 蘭 克 大 鬼 幸 輪 枝 焼 金堂の朱塗へ五月の 如来さま法要の人 人 H 波に沈むお地蔵海女の手でまもり 寄りそうような山里の屋根 ゴルフコー 人を恋う宿で椿の苗もらう 出稼ぎの 捨てがたきものに巨大な耳 金持ち 門番のような顔 教会の塔なつかし 桜古木朽ちて街道過疎進む ほ I 古い日記の蚊が死 ポプラ吹く 定 ざるそばを食べて革命 スランプの自分を痛め 光菩薩如来へ少し腰を曲 メラルド予算 たる翔ぶあれは亡き母 薬師寺 美杉村三多気を訪 0 父の 0 父の書留まだ着 鯉より高 (落慶法要) 三句 スの 風は 背中を見 隅ですみれ が二桁ほど違う L き鯉 って雨蛙 偽善 んでいる一頁 き初夏とな ねて 碧 てい 人人に 0 など出来ぬ 1) 母あれば耳の垢 0 つけてみる ぼ 包 tz 0 いする h 0 b つむ は父 酔うた顔 花 3 泉佐野 があ 京 都市 市 3 松 高 谷 萬 杉 垣 杜 萬 鬼 史

遊

好

的

的

磨崖 お 東 さ 14 h 0 んのもめ 歴史へ蟹が匐うている 事 にも触れてバスガイ 13

桜井市 岩 本 雀 踊 子

蜥蜴 左り チ 利きさほど器用な子でもない = ロチ = ロ仁王さんも眠くなり

ひとり来てひとり楽しむ古都の春 帳 面な人に一円生きている

きき流 す耳を持たない苦労性

大阪市 江. 城 修 史

愛慾 寝姿のかさに疲れを見せて妻 きし 0 果てなる犠牲子 石 にはあらぬ吾が心 が背負

金策へ今日 のしこり絆と言う もリズ ムの ない 步巾

岸和田 市 橋

子

漬物がおいしく出 来た日の 茶がゆ

上棟式何 棟式何をか祈る手を合わ 似て石仏へ話しかけ

棟梁 棟梁にこんな顔あり棟上る の音痴最後をしめくくり

か すくすくと孫の育ちて春雨 なしさは少女まじりしチンド ン屋

大根を抜けば尊しい

愛の密度をつかみたり

地下の営み

天引きという手は有無を言わさぬ手

ふり返ってはどこまでも続く道

のしばしを亡妻と語り合う

天 TE Ŧ 梢

H

本の象徴だよと丸

い背

17

11

汚れると紙幣は本物らしくなる

大阪市

える命 、奏でる曲 知らず

12 本 1 、ンを折 3 歌山 市

野

村

太

茂 津

肝炎 フライホイル主役の留守を守る安偖 反省の構 0 奇 え一 本目のペン静か

無念無想病室の壁白きま 雑念を病床に消す天の 吉 ま

秋風と悟る日ニンゲンらしくなり ないを持 たぬつぶらな瞳 に射られ

県

嘉 数

Ŧ.

病葉が風をしずか 音が親をはなれる音 た顔が鏡の中にい に聞 一で鳴る 11 てい to 3

あ

きらめ

いり 7 浄土 寝てるまも浄土 島根県

堀

背向 働 17 てい ても動きを妻は 知 3

茶碗置 手さぐりは雲の動きに気がつ く音のまるさや有難し かず

いぼちぼち起きて来い と呼

藤 甲

I.

江. IF: 朗

春宵一刻! 菖蒲 先頭 そら耳 野次馬 連休の企 断 神 手品師 薔薇抱けば少し気取ってみたくなる 老骨を庇えばきつい おさな心の奈落の怖さ甦えり ゆきずりに幼馴染の白白し 星奪りに円型ビルへ登ろうか 憂国を説く 風 あち切 H 苑の P ~ 湯に私を浮 は今どのあ る馬 一刻価千金猫の恋 すき鉄 だっ にこれ 0 かやぐら太鼓が響くなり 82 0 スやっ み夫の汗盗む へネクタイ締 たえにしへ疼く後遺症 け道知っ 鹿な石 た幼き三 一階に種 村塾が見当らぬ 路 は豊かな滝 ぱり南 かせて見 たり労 しらじら娘の嫁きし 垣 た頃の が置 積 向 番 み上 働 8 母 いてある 17 0 向きたがる 歌 風 恋 直 の音 げ 8 寸 7 15 3 大阪市 香川県 11 加 木 香 = 出 多 野 井 III 智 君 柳 醉 酔 子 子 志 K 新入生なりにライバルもうつくり 初恋と世間話をして別れ目が見えばじ 手作りの芸は妥協を許さない 定年やっと自分の足で歩く 声 聖書読む瞳が水色になってくる 贅沢な昼かも知れぬ髪洗う 三面鏡 本当は哀しい男かも知れ 夕映 母子草 力 受話器から噂 唇を奪れそうな初夏の宵 あじさいの彩に告白したく 誘惑にのれる若さがほしくなる 笑う日も泣 若さとの距 7 高 1 ッチンをみがいて噂から逃 0 い方へ餅まき餅を撒 ネ えに絵になる女と立ってみる 5 ーショ らに もう偽りを隠せない 母を想わぬ日とてなし 離が く日もあ あ ンもろ手に贈られ亡母を恋う 3 運命 つがころげでた 延びたり縮 めって悔 を嗤え 3 13 、なる を積 h な 船 だり 15 鳥取 兵庫県 貝塚市 to 8 市 遠 高 野 坂 III Щ 橋 洋 П Y 3 住 花 々 子

誕生 大砂 社 若うつくる女に一足早い 素人の斬るには惜しい枝ばか 風紋を繕う風を僕も待 暮れ残る菖 風 銀 冷え切って女一人の城まもる 伝説を抱いて沈んでゆく 腹立てる元気もなくて酢を嘗める 雨もまた良しとは旅の負け惜しみ ストライキ食えぬくら 2 「壇の亡父にも新築見て貰い タの り急ぐ 邪引いてグラムで決める味となる 会との絆を知った救急車 生の神秘教える語が 丘 滅された落ち目をくやしが にかかわりの 多 へ妻の白髪はもう抜かず 人出 羽織 星座に恋の軌跡みる の煙りで母の味 桜 「蒲は恋 る句 へ逝きし 媚びる息が切れ 集 泉は春生れ 無いくすり指 子を偲 がかすむ しの巾 ち 毬藻 が出 夏 CK にいる h 3 東大阪市 和 5 奈良市 郡 Щ 市 森 宮 111  $\mathbb{H}$ 中 力 弘 笛 ズ 生 生 工 そろば 出靴しの へんてこなふれ合いしつこく来るレ体験談敵は幾万ありとても 信 背で泣く父の男を見てしま 爪 歯 戸 7 どたん場に来て退職を淋 つじつまを合わす計算器を廻す 予防線張ってる話 信念はまだこれからという気 父と子の距離を縮めて酌ぎこぼし 頂上を見ない一と筋道を行く 還らない若さ老人乗車証 を開 木目 号の赤 城の、 の紐男のいくさらしく締め を切る女ちかごろ絵にならず が二本のぞいた我が家の福の神 1 木 切った力で男負けている it に音符のように ーム妻には妻の 主に戻る炉 んの音がはずんだキャ ヒップ自信 てい 園 児の る野良猫 がばた焼 目 に満ちあ の裏が見え 0 佇 平 素 0 しがり 面 0 面 直 尼 3 11 义 構 僧 ッシュです え 松原市 原市 ター Ш 玉 奥 水 粉 内 谷 置 弘 T 静 重

翁

水

朗

中の場は花が散りこむ桧の香りゆく春を惜しむ余韻の寺を辞し金になる一字一字の自己嫌悪自転車は押して帰るよ春の月まを聴く足のしびれに嘘がないまを聴く足のしびれに嘘がない島根県を告げてしまって疲労感島根県なおンボン時計が鳴りひびき	風船のもう満足をしてすぼみ 流の見に君がいて僕がいて 満天の星に君がいて僕がいて 大阪市	送り出すひとこと師として友として びたむきな祈りに神の声がする 心こころと唱えて心の音聞けず かの人は遠し雨だれ胸をうつ 不可能への挑戦わたしには夢がある	餌買うて奈良を撮りたい鹿を呼ぶ容姿端麗から売れている胡瓜
\[\sqrt{\sq}\sqrt{\sq}}\sqrt{\sq}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}	中田	10.000	
砂	JII 12	な 田 維	
白	滋 —	- 久	
汀	雀	各 子	
金剛の水飲んでいる咽喉仏 山男懺悔の石を積みにゆく 鳥が鳴く方へ振り向く軽い罪 水割りの水金剛山に湧いている 確促をしたら男と切れていた 残り火を抱いて人形になりました 残り火を抱いて人形になりました	金舎も言うへ白し甘か多し 金舎も言うへ白し甘か多し 郷愁の中に生きてる母の顔 窓れ得ぬひと人妻の胸に住み スキャンダル女見事に生きる紅 スキャンダル女見事に生きる紅	という 関わびしさだ 関わびしさだ 関わびしさだ	艫売りと嘘買いどうにも手が切れず
宮	板	族	錦
西	尾	村	織
弥	岳	×	文
生.	人	女	子

紫の花むらさきの露を置く	老いわびし胸の鏡に写るひと	ネオン街逢うてはならぬ人に逢い	古里の汐の匂いの活け造り	高槻市	草枕妻は初恋の頃の夢	良妻を一寸不満に思う日も	背を流しながら新婚の頃にふれ	湯上りの妻 女に戻り	松江市	湯加減にまるめ込まれて癒す胸	もう眠れそうな欠伸へ本を閉じ	また想い出させておいて春は去に	快眠の醒めていいことありそうで	島根県	少年の肢体軽やか五月晴れ	春雷に難聴ひとり自若たり	やれやれと内湯に浸る花疲れ	花に寝て花で覚めてる石仏	大阪市	枝一つ切るのに妻へこのへんか	死火山で終るか底は燃えに燃え	ふるさとは姉が継いでた蓬餅	ふるさとはころころ山がまだあった	倉敷市
				若					柳					堀					西					田
				柳					楽					江					出					垣
				潮					鶴					芳					-					方
				花					丸					子					栄					大
す引き	花も夏黒髪の日に戻りたく	氷見市	雨無情峯寺ひっそり声もせず	茶をたてる僧衣の端がすれる音	山寺の古き草木みな静か	木次の峯寺	茶をこばすことも話題になるお内儀	尼崎市	真実を忘れたときのいい心地	美しい花と勝手にいうてみる	ニンニクの味を女房もわかり出し	ちそう描いても子供の顔になってこず	孫憲治初節句寄鯉幟之図	豊中市	妻にまだきれいな声の子守唄	妻の名の蔭に勘忍袋おく	黙秘して男の芯を見せつける	この頃の句に荒れている夫婦仲	鳥取市	惰眠馴れ小さな儲け聞き流し	散り敷いた花絨氈を踏む春愁	今年また花見損うた空模様	お彼岸の回向は寺へ委せきり	西宮市
		関						黒						戸					河					島
								Ш						田					村					居
		美						紫						古					日					百
		子						香						方					満					酒

便箋 老い 父逝っ 通勤 人間 素晴らしい人で痛みが身につかず 批判ぐせなんでも天秤にかけたがり 11 8 親会社のリモコン社長をおどらせる 女房へうつして風邪が全快し ぬすみたいほど 気の抜けた頃 後のない土俵 過保護児に自由が欲しい上野駅 十口 ブザブと洗って悪夢忘れたし 0 しさを深夜放送撫でてくれ い溝うめる構図を胸に秘 IZ 0 0 の誹謗あびている無想 のさくらで満足しとく春 の素直春秋彼岸二 面どころかもっと顔をもち て炉 雨の 間 のいらいら続く足のスト わいだん 12 12 五月を走らせ 参寿になった誕生 に似たり我が余生 遊ぶ人間 誤植訂 よくはれたつき いとも絶妙 遠くなる 30 H 東大阪市 富田林市 神戸市 愛媛県 大阪市 岩 仲 落 渡 Ш ど Ш 合 辺 h 思 美 ŚП 暁 た < 代 月 茶 童 伝説 札 幸せと悟らず運を待っている 成程と云う生きようも見せられ 七五調の 燃ゆる火を秘めて静かに座す女 紫陽花のような女の光る肌 満ち足りた女の顔の痴呆めき 亡父ならばどうすることへ突き当り もの思い疲れ机の花を替え たて通す意地 カーテンの 底辺で吹く口笛が音にならず 引き倒す土蔵歴史の音を立て 辞 東を握 5 0 を蒔く素足に春の土ぬくし 表出す朝も靴ベラよくすべ な日でちぎれ雲さえスリラーめく がい ない娘の倖へ父の の山生き生きと霧を抜け の余韻がグランド夕焼 握って男の狂い咲き の誤 口説へ女身を崩 色気で揉めた老夫婦 解され 襟脚もうしなわ てる楽しさよ ける h 中 る 大阪市 岡山県 竹原市 倉敷市 枚方市 宮 直 神 Ξ 11 谷 原 宅 Ш 幡 凡 七 不 珠 里 九 面 Ш 朽 笑

風

郎

平 田 実 男	田植機を押して農夫に唄がない田植機を押して農夫に唄がない田植明もなくエンジンの音ばかり女房の茶話小さい夢があり大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・大阪市・	の夜心の支えになるネズミ の正器に一パイひっかける 松江市 を吹く五月風見当らず	百性をやめろやめろと家が建ち 狂人が笑っているよう波の音 少年が母恋う丘の風白し 母でない母で少年Aとなる 岸和田市 ボーナスに関係のないビラを呉れ	境界の杭からしっくりせぬ隣り大きいことはいい事でない娘の肥りがあとへ医者不機嫌な顔になりのとない娘の肥りがある。	愚かなる者の一人として自分 宇部市 一
日本 大阪市 柳 原 本 大阪市 宮 尾 あ 大阪市 場 県 学 ※壁にミレーが貼ってある    東		怛	個	越	<b>水</b>
実 男 百億のはずれが吹雪く五月賞		松	浦	智	田
下金の名竿今日も空の魚篭 下金の名竿今日も空の魚篭 下金の名竿今日も空の魚篭 下金の名竿今日も空の魚篭 下ち足りた日は故里の夢も見ず 不二田一三夫先生句集刊行を祝して一句 「川柳寄席」聴えぬ耳に寄席ばやしまだ燃えるものあり老いへ紅を引く と染めて燃える火種を消さずおく大阪市 宮 尾 あたたとデート墓地のさつきがのぞき込むうたた寝が出来る身分になりました 島根県 神原 石井晴れ交す言葉もみんな晴れ 高根県 神原 電機械化の田圃に詩が消えてゆく 一聞いて十知る才をあぶながり地獄でも敬遠しそうなお人よし エセンチの陽光逃がさず干すコーポ 島根県 神原 金 宝塚でも敬遠しそうなお人よし 地獄でも敬遠しそうなお人よし 原 単原 を まな		山,	勝		実
金の名竿今日も空の魚篭 金の名竿今日も空の魚篭 を足りた日は故里の夢も見ず 不二田一三夫先生句集刊行を祝して一句 不二田一三夫先生句集刊行を祝して一句 不二田一三夫先生句集刊行を祝して一句 「ない活けても心を風が抜けで合う亡夫に墓参うながされたとデート墓地のさつきがのぞき込むたた寝が出来る身分になりました。 島根県 榊 原 空市場主婦へ小さい倖せを 端にたんぽぼ残る城下町 構体せ意見かみ合う夫婦でも 宝塚市 傍 島 歌でも敬遠しそうなお人よし センチの陽光逃がさず干すコーポ にたんぽほうなおり は アンチの陽光逃がさず干すコーポ にたんぽほうなおり は 原 神 原 宝塚正としてが貼ってある 出 原 神 原 本 に た に 寝 が は ま な が り は で も 敬遠しそうなお人よし ま な が り は で も 敬遠しそうなお人よし ま な が り は 原 神 原 本 に た に と い ま い ま し た に 寝 が 出 ま る か と で も ま な か ら ま し た に 寝 が 出 ま る か に たんぽ ま み ら さ な が り は に たんぽ ま み ら な お ら よ し た に 寝 が は に たんぽ す ま か と で も ま な か ら ま し た に 寝 が は に たんぽ は ま な か ら な は い と が さ か ら は い と が ら い と が ら な が ら は い と が ら い と が ら は い と が ら い と が ら い と が ら い と が ら い と い と が ら い と が ら い と が ら い と が ら い と い と が ら い と が ら い と が ら い と い と が ら い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と い と い と い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と い と が ら い と は い と い と い と い と い と い と い と が ら い と い と い と い と い と い と い と い と い と い	堂	紅	晴	水	男
	が壁にミレーが貼ってある がて十知る才をあぶながり いて十知る才をあぶながり いて十知る才をあぶながり 出	市場主婦へ小さい倖せを 市場主婦へ小さい倖せを にたんぽぽ残る城下町 にたんぽぽ残る城下町	大阪市 宮 尾で合う亡夫に墓参うながされで合う亡夫に墓参うながされても心を風が抜け 一ぱい活けても心を風が抜け 大阪市 宮 尾	くして一句	のはずれが吹雪く五月賞 大阪市 柳
	敬一	静馬	禾		静香

乗り込 立売りの老婆い 0 みし あ の日 法被に聞けばご大祭 に時 くさのことにふれ いた花 が咲き

松江市 中 JII 晃

終列車通して小駅目を閉じる 人様が御案じ下さる退職 一の空気一杯吸うて留守番す 職をしてカミサンに使われ 金 3

昼 退

平田 市 久 代 仕: 男

金柱 がりの中にぼっかり青天井 秋芳洞にて 弥陀仏の声きこえそう

山黄暗 風 はらむ鯉にきらめく柿若葉 蕗の若葉五月の陽をはじき

兵庫 県 大 江. 秋 月

足の児よりも ママがはし P

亡父の墓に好きだったたばこさしてやり 遠

ソクリもいつか不要な年令に なり

三足の靴を送って妻忙し

和 歌山市

垂

井

干.

寿

子

肩書をつけて体よく左遷され

硫

黄の香

の女で下座撰っている

ふる里の母は手錠を信じない

年令の功お金で買えぬものを知る 本堂の継ぎ張り障子に 不況風

神戸市 中 村 W 3

を

神の

前天恩感謝するも年

よう喋る女 焦点ない女 華麗なる女の砂が崩れる日 ハミングで米をといでる楽

17

H

このあとが恐い男の おも

b

43 松山市

谷

0

3

お

負け馬にも勝ち馬にも緑の も生きる権利の葉を食べ 風が 吹く 3

いも虫

心まるく柏手冴える日

の祈

h

· 面 0 業が燃えてる夜の底

泉大津市

村

Ŀ

春

E

いい旅をおすそ分けする土産選る磯の香をカラー写真にして帰り 富士山と生きた老婆の磯なまり

0 雲仙の宿 リスへやさしく妻話

> 守口 市 村

瓢

太

母の日に小遣くれる娘等おりて 散るもよし風情を添える花ならば 夢の中まで追って来る

黒板の先生の字にも上手下手 サングラスお面かぶった気にさせる ストに沸く怒り

予定又くずされ

竹

中

女

鈴     岡     小     林       木     崎     谷       村     社     個     露       子     月     山     杖	藤井寺市 西 いわを	インカ文明展一句	らない判らぬ虚にいる夫婦	かの一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の	やわらかな響をもった宿浴衣	空翔ける鳶は遊んでいないです	大阪市 黒 田 真 砂 想い出はひとり桔梗の芽を覗く	新調の心弾ます春の風 玉野市	たかぶりを消すには惜しい夢であり	穴	七曲りして人生の虹見つけ	西宮市 若 林 草 右 明日は雨土工にくらい夢を見る	街角の石焼き明治の声も売り松江市	よれよれの机ばかり奥様の市場籠 人生のサイコロ66で上る運	大安を見つけたプラットの振袖	顔を見てローンのマッチ渡される 限界も越さないねじを今日も巻く	京都市 都 倉 求 芽 初夏の陽に五尺八寸背伸びする		福耳がいつも鷹揚に笑ってる	緊張がようやくほぐれた咽喉仏		どこからか金が出てくる妻の腕	大阪市 神夏磯道子	せな日のヒロインとして装いぬ 大阪市 神夏 磯 道子 終戦を時こからか金が出てくる妻の腕	る	目をされて仮面が欲しくなり 大阪市 神 夏 磯 道 子 と書うている 大阪市 神 夏 磯 道 子 と戦を時代評価の段落に 大阪市 神 夏 磯 道 子 を戦を時代評価の段落に 大阪市 神 夏 磯 道 子
公     公       大     公       村     位       本     6       村     位       本     位       基     企	鳥取県		年		たし	くのぞかせて	芽を覗く	玉野市	に召し	の目を信じ	奴	夢を見る	松江市	る運	ラシド人生譜	今日も巻く	伸びする	鳥取県	梨交配	Ž	٤	12	FE	発信計	て来る	て来る
十																							大			
十								谷					崎										矢			
	唇							仙					祥										+			
	丈	- 7						Щ					月										郎			

1 D フ 1 は 值 踏み賞状は見てくれ す

岡山県 竹 内 翁 童

ふくよ 出を水中花にして寡婦強し かな笑顔 汚職をさとらせず

子思のい 無い 夫婦の語る安楽死

な正論酔うているらし

安 4 次 弘 道

生命

品まだ惜

しく倖せ圏

嘘の 結果論度胸のなさに気がつかず ない自然が好きと敗北者

葉桜やまだ予備校にある暗さ へ行こう親孝行になるそうな

大 塚 生

ル バ ムの巻頭飾る新夫婦 へ告げることがあ h

T

11 家計簿の余白 ネムーンこころ新たに酌み直 寸

言 い訳はせず忠告へじっと耐 え

なじみの吊皮がな い新幹線 羽曳 野

塩

満

敏

ランドセルが歩いてる新学期 な

ストの 泣きべその連休パパは高いび ビラ敵意のこもる手もつかむ き

諫早市

原

明

春

追 嫁が来て料理に馴染むホーク持つ 安の列へ不況が横たわり 及を与党タバコの輪 でそらし

タテ前 人間 をオスメスと見る週刊誌 の方 みんなは手を叩く

尾 かたつむりお前も向きを変えたの は ふらぬ L かし淋しい僕なんだ か

ブレ 人生はすばらし無から有を生み 深呼吸して祝辞の席に起ち ゼ ント僕の好みを汲ん でいる

定退の招かれてからの荷が重し

醜悪の谷間 松喰虫神域とても遠慮せず もほれぼれとする娘に育ち に小さく咲く善意

がまだうろたえている公害

木

間

満

津

子

月晴 でも乗りたい雲が一 留守居 0 窓の ガラス拭 つあ h <

誰

12

Ŧi.

怪獣 新調の着物で行きたい同窓会 を折れと折紙困らさ

n

八尾市 内 生

ぼんぼりの残骸葉桜気に入らず くもの巣の主いずこに召されたる にい 0 胃 3

一杯は余分に入いる宿屋

山県

岩 文 衛

É

# 春 H

倉敷市

藤

岩 井 本 蔭 棒

-15-

鯉 0 ぼ りウ ĺ 7 ンリ ブの 屋 根 泳ぐ 東大阪市 木 多 清 本 1 步 てみ to 13 旅

部 だけ燃えてる 13 に打 たれ ストに 3 屋 根でな 加 わ 3 L れ

高

凡 通 人の喜怒哀楽が顔 IC 出 7

幹 車笑顔が返る顔 なじみ

大阪市 神 秀 峰

阿呆に小さな腹を立 の無い世の不倖せ

世 疑 短

0

中

0

えばきりの 所からみれ 機

化

ばあ

ちゃ

ん迄もイングリ

"

2 2

陽

12

向

か

W2

ひま

わ

りもあ b 图 11 日 守 H Thi 野 呂

右

近

それ 兵隊の階級残って居た集い ぞれに 老い まろやかに再会す

芝考え込んで歩 <

原  $\mathbb{H}$ 

風

人生

は

F

り坂だよ急くな君

徴笑だけ残し

刹那の慕情去

WZ

原 静 北

守

口

こそば

ゆいとこに

腹

0

立

事ばかり

なり今日微熱 女が残ってた 人間

0 い集めて

不遜

中絶 俺

安楽死

の句を作る

松

風 12

に瞽女美

しく

たり

のちを沈

花

にひたひ

た心

経が匂う

±

還る春のい

初め 石を投じ てに L ては馴 て反応見るとする n ている見合い

ライバ きょうは違った友さそう ルの左遷やっぱり気にか か 3

妻の まざる努力裏切る子が 目 が嘘を許している余祐 育 ち

少年 ひと 様 の嘘三段に組まれてた の若さが気になる日 が続 き

年黒坂いの 空気 h 0 んと続 苔のマスクで菩薩さま 11 て駄馬の 汗尽きず

0 れ く度か阿呆で過ごす日が欲 ん女の嘘に 逢 17 たく L

君の遺句しばし追慕の虜となる 随 を曲 げて華道の前 衛派

野

田

素

身

郎

休 年 人にはなりたしなれば淋しかろ 十間近 道をあ をあ てでるも歳 けろという辞令 敷市

連定

加 # 庸

佑

藤井寺市 児 島 与

Z 志

植 英 詩

呉

原

独 仙

の道 歩けばやたら蹴

倉敷市 稲  $\mathbf{H}$ 

作

豐

父と子が世代差抜きによく笑う 癖も似てる息子に酌いでやる

憤懣のやり場亡妻へ鉦たたく 沈黙は金 老の護身術

正論を吐く職 人を憎まれず

> 沢 Ш 福

和歌山市

水

有終の美へ口紅も薄く引き 枕頭に不幸を詫びる花を活け

書きたりぬ心追伸でも足 りず

鳥取県

清

水

保

政界の謎へ怒りのペン錆びず

大会が迫り私を忘る日 柳大会を控えて K

郵便に一喜一憂するプラン

エンデンの音が鞭打つ農繁期

山峡の詩に打算を叱られる

竹原市

森

井

居

春 負けて来て天井の低さに気付く ハゲタカの如しセールスきつい日々 0 安らぎ忙中の閑を寝る

お いみやげ 東を抱え紅 いは無事 一点に子は照れ に帰った息子 0 笑顔 大東市

士

岐

1

ク 子

花

る

歓迎 のうずに母うろうろかしこ

の宴たけなわに亡父の唄 香川県

举

法

国鉄はストと赤字が取柄です

頑張りにも限度ちかれたびがはやり

本四架橋どうでもいるものですかね 蔭口の俺もするのだ聞き流す

石橋を叩けば叩くほど怯気つき 汗をふきふき渡御を待つ夏祭

大阪市

西

III

誓

女ですもの涙も私のよりどころ 深い訳あるのにとや角第三者

這えば立て立てば習わす事多し

身の 程を悟れば人生恙が無し

旅疲れ寛ぐ我が家の古 挨拶も鏡の中で美容院

たわむれに名を書きとめてどうする気 たきつけた女が燃えたあわてよう

島根県

儿

村

早

苗

だまされてやろう鳥が吹くラッパ ころんだ子おこして嫁に叱られる

焼け落ちし 家に残りし犬を抱

さまざまな私語焼跡に佇つ耳に

京都市 山 規 朗

17

和歌山市

吉

野

富

鏡にはウソのつけない眼に小じわ 一天阪市 藤田頂留子 バスガイ愛語る時にも打算うごめいて 大阪市 藤田頂留子 週刊誌一	じっと見れば鳩にも嫉妬毛を立てる 採用にマ金婚の旅新婚と違う味	津市 新 岡 回 天 子 新聞	水をえた種子おもむろに芽ぶき出し 両親が近くに住んでる安ど感 方言まるだし故郷の温かさ 失業は無	島取市 佐 々 木 静 泉 装いを一他人の不幸喜ぶところもち合わせ	竜寺拝観料とる水を撒き 兵庫県 河 原 み の る お食事	貯金通帳悪戦苦闘の姿あり とこう おおお おおお おおお おお おお おお お	屋	I I I E
千里ケ浜こんな心になれたならバスガイド指さす山は春霞週刊誌一冊読んで受診の順	にマルクス論は引きこめる	では三十過ぎての縁といるといっしょ老眼鏡もくる	の人生老いをかばい合い東大阪市は無いだろ蟻の列続き	を一枚はいで初夏の風和泉市	たく仕草へ頼りにしていまの意見長い物に巻かれいまを出すんですかとメモが	くもの包む真赤なワンピース(にセキーつ念を押す電話)の顔を煙りがなでて行く	スト呆けの貨車のろのろと野を走る 顔の皺消し肖像画出来上り	ジムでキューショ 大一ト
	室	Ī	斎	西	i	松	増	溝
	谷		藤	岡		本	田	口
	徹		三. 十·	洛		忠	竹	は

酔 三

馬

を

舟

四

豪快な音譜書いてる滝 から 1 +}-4 過 3 逆 果

隠れ寺さくら枝垂 n て天に あ h

心運 嬉 さくら若葉 のなかへ落書をして気が晴れ いときは嬉 遠山は雨あがるらし in 顔の地蔵さま 3

IE.

本 水 客

高 薰

橘

風

美味 to 0 水求真 to 5 なくも

それにつけても金が

要

チト長生きを悔

11 h

若

本

多

久

志

金詰

り血の縺りという他人

家裁へ行く

鞄に他人が詰めてあ

3

運はないされど聖書は手離さず

言葉まで凍らす風

が袂れさせ

すぐに私

に立てる

旗

から

なない

菊

沢

11

松

景

瞬

12

きまる

から

男

好

晴耕雨読 治るかも知れぬ手術 旅のポスター へ踏み切れ が招 3

えて毀傷せず 亡き父母にまみえん す

あ

か

緑 助

とっちに流 れ 伯

ちま苗を買 のがまだ残ってる植木市 27 ます 範置

にきまりました。

五大記十の億

男などと女 がありません

と男の返事なり

西

尾

栞

51

年

度の同

人総会と二賞発表句会は10月3

H

日

んずる

音で先に呼ば

n 男を軽

た男なり

訳

の下手な男の定期券

お見舞に買った花束赤すぎて嵯峨の春バスの遅れにいらだたず

どこをどう越

してきたのか丸

い石

妬くような年でないのに噂きく

表札は亡夫の名なり一

周

狛犬の一つ欠けたる木下

H

III

村

好

郎

あ

0

ち

に流れ

沿

0

出い。出

し笑いも初夏の風なれば 家並も規格品増えて お

ん目元さつき明りの

U

給

える

鑑真和上像

悼阪上十止庵兄

裏切りの枕は真

つこ

つに

割

れる

III

社:



昭和18年6月14日、川 雑西宮支部創立句会

職業川柳人宣言

麻生路部教

(19)

最も劇的なまで

身にとっても畢生の決断力を要したかは、彼 言のそれであった。いかにこのことが、 自らが筆を執った二つの記録にも明らかだ。 に悲壮な生涯の一大転機は、職業川柳人の宣 柳人麻生路郎にとって、 彼自

に対して三案を提出した。その結果、最後の 負うて立とうという人はいなかった。結局、 ることになった。しかし同人の誰もが社を背 ために同人会を開いて、社運の挽回策を講じ 件であるか、発表の限りではないが、それが 任上、主幹辞退を同人会に申出た。どんな事 投げ込むような事件が起った。私は監督の責 私に善後策の質問があったので、今後の経営 昭和十一年六月に一挙にして、社を深淵に

> して川柳職業人を宣言した。 かった。そしてこれを一転機として、敢然と 身も氷嚢を頸筋にのせて、七月号の編集にか った。家庭には重病人を抱えていた際、私自 易なわざではなかったが、私は奮然として起 案である路郎の個人経営に落ちついた。 これは以前から考えていた 九分九厘まで倒壊した塔を引起す作業は容

という自己の所論の実践に外ならなかった。 興した。 は勿論海外柳人までも網羅した川柳人協会を そして同時に斯界の隆昌と交歓のため、内地 あらず、為さざるなり」 専門家なき世界は発達せず、能はざるに

> 辨誌奉道・昭和十八年十一月号 むきに突入した。

はその厚意を謝して自己の信じる道へ、

ひた

(「川柳雑誌」NO239・

たことは周知の通りである。川柳職業人宣言 同時に、直接門下のみによる不朽洞会が生れ 同人制を廃して社が私の個人経営となると

> 東 野

ない。 私に新しい職業を斡旋しようとされたが、私 らも無暴の挙ではないかとひそかに危ぶまれ と笑った人たちもあった。川柳人外の知己か は、全柳界の問題となったことは云うまでも 一そんなことできますか

たのである。 ではなかった。私の実行して来たことはすべ とをやって来た。しかし私自身は決して無暴 って、成算のない企画は一つもしていなかっ て、十年間位練りに練って断行したものであ 私は今まで外部から見れば無暴に等し

真似をすることはやさしい。しかし創作に

しろ、事業にしろ、未踏の地を開拓するとなるとなまやさしいことで出来よう筈のないころとをイヤというほど知っていた自分は、自分とをイヤというほど知っていた自分は、自分一人で練りに練ることを辞さなかったのである。私が専門家なき世界は発達せずと号してる。そんなととが出来るものかと、真っ先に反対のの方人切己も愕いて、そんな無暴なことをして食えるか、といって衷心から引き留めてくれた。いい職業を押しつけての忠告をめてくれた。いい職業を押しつけての忠告をめてくれた。いい職業を押しつけての忠告をめてくれた。いい職業を押しつけての忠告をめてくれた。いい職業を押しつけての忠告をめてくれた。いい職業を押しつけての忠告をして食えるか、といって衷心から引き留かない。

援がしたいからと云ってくれた。一生活にお困りの時にはお知らせ下さい、応悲壮である。甚だ失礼な云い分であるが、万悲壮である。甚だ失礼な云い分であるが、万まないりである。

一浪老である。

一浪老である。

一浪老である。

一浪老である。

様・昭和川二年七月号) こ連れて毎日ビル通いをして、専心柳界のた ご連れて毎日ビル通いをして、専心柳界のた ご連れて毎日ビル通いをして、専心柳界のた ではり、新聞記者の入社を求め、妻子を引

のあまり、遂に本職を捨てて金にもならない路郎は川柳の社会進出と、質的向上を思う

川柳一本で立つことを決心した

配らねばならなかった。乗組員は私達夫婦とゴザを敷いた和船なので、絶えず天候に気を ゆかなかった。
中心に回っている星は、軌道をはずす訳にはていたい子供もあったであろう。然し太陽を 型専門誌の発行と、川柳に関連ある仕事 れば読者にアトラクティヴであるかを競うが たい子供もあったろうし、山手の住宅で残っ て乗ったのである。いつまでも浜で遊んでい て乗船したのではない。父が乗ったから続い 子供達である。勿論、子供達は目当てがあっ ブスのアメリカ発見に類するものであった。 たのだから、路郎のこの企ては、恰もコロン いても、子沢山の渡世は決して楽ではなかっ 加うるに路郎には、その当時五人の子供があ で安心のできる所得のあろう筈はなかった。 る。この競争の烈しい中で、薄っぺらな短詩 色彩によって購読者の眼を捕えようとしてい 如く、多種多様の雑誌は書店の店頭で濃厚な た。きまった職に就いていて孜々として働 このアメリカ発見の舟は、みすぼらしい荒 一番読者の多い大衆雑誌でさえ、 如何にす

はおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたれれていった。子供達の一人は舵をとった。他れていった。子供達の一人は舵をとった。他れていった。子供達の一人は舵をとった。他の一人は櫓をこいだ。時化を食ったらみんなでかぶった水を船から外へ掬み出した。路郎は軸に立って動かなかった。バロメーターであり、パイロットでもあったからである。私はおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたればおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたればおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたればおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたればおとないとである。

のた。(下略=路郎の独立宣言文より) のた。(下略=路郎の独立宣言文より、私自身は職業川柳人を宣言し、名実となり、私自身は職業川柳人を宣言し、名実となり、私自身は職業川柳人を宣言し、名実に社会的柳誌としてデビューすることとなった。(下略=路郎の独立宣言文より)

た。路郎の苦闘はこの時からはじまった。たが、その頃の川柳に対する社会的認識の度を考慮すれば、これは冒険であった。時期合を考慮すれば、これは冒険であった。時期のなどは狂人沙汰である、と評する者もあってなどは狂人沙汰である、と評する者もあった。路郎の苦闘はこの時からはじまった。

乱沈ま「先主、正式ですが」となっから、路郎は二百円を要求した。当時の塊人のし、路郎は二百円を要求した。当時の塊人のし、路郎は二百円を要求した。当時の塊人のは、路郎は二百円を要求した。当時の地域のであった。

柳人としての立場を誇示したのである。そのか人としての立場を誇示したので、自己の職業川う。路郎はこのような態度で、自己の職業川支払ったとのことである。食満南北であれば支払ったとのことである。食満南北であれば

理解されなかった。

理解されなかった。

理解されなかった。

理解されなかった。

理解されなかった。

番傘川 て譲歩しなかった。その心の底には も強大であったにもかかわらず、 ない立場であったが、その場合、特に路郎は 人協会結成以来、戦後現在の大阪文化祭川 求した。 尖鋭に執拗に代表幹事、委員長等の地位を要 なく、吟社の主幹としてそれを求めざるを得 首席について争いつづけた。個人としてでは せんとする場合に、路郎、水府の二人はその 大会に至るまで、大阪川柳界が一致して行動 柳社の方が歴史も古く、 世間的にみれば、 日華事変のはじまった頃の大阪 川柳雑誌社よりも 全国的な分野 路郎は断じ

一権は職業川柳人である。君達はアマチュー権は職業川柳人である。君達はアマチュ

己の不明を泉下に謝するのみである。(「ょぁうが、離もそれを理解しようとはしなかった。筆者の如きは常に同席していたにもかかた。筆者の如きは常に同席していたにもかかた。第在、自ら雑文屋渡世を名乗る身となったの、現在、自ら雑文屋渡世を名乗る身となったの、当年の路郎の心境に思いをいたし、自てから当時の路郎の心境に思いをいたし、自てから当時の路郎の一貫した主張があったのであろという路郎の一貫した主張があったのである。(「ょぁ

百卯早、丽コ鬼人) うすと」NO503、昭和四十八年四月号。昭和前期の明

四十年も前の話である。とではない。戦前三・ある。それも現在のことではない。戦前三・どだい川柳で飯を食う、なんて無茶な話で

やさかいなあ」

そさかしたましていた。何が彼をそうせしめたか。と豪語していた。何が彼をそうせしめたか。

被は関西短詩文学連盟理事長の職を固守した。これは個人的野心であるかのようにみられた。しかし、川柳が、短歌、俳句、詩と同柳人の悲願ではなかったであろうか。連盟は本の夢を実現し、さらにそれを拡大しようとする運動の一つであった。しかし、柳界ではからである。従って短詩文学専門の図書館建からである。従って短詩文学専門の図書館建からである。従って短詩文学連盟理事長の職を固守した。というである。従って短詩文学連門の図書館建からである。従って短詩文学連盟理事長の職を固守した。

川柳界にはいろいろ新しい運動が行われて川柳界にはいろいろ新しい運動が行われて川柳界にはいろいろ新しい運動が行われて川柳の枠内をはみ出し得なかったり、川柳のに過ぎない。然るに路郎氏の眼はいつも川柳に過ぎない。然るに路郎氏の眼はいつも川柳の外に向けられていた。彼の叛骨精神にとって川柳界はあまりにも狭すぎるのである。(二川柳葉誌」NO460、麻生路郎追悼号、昭和四十年九二八十年

川柳職業人宣言の昭和十一年に、「川柳雑二十年に、「川柳職業人宣言の昭和十一年に、「川柳雑郎を一洗しようと図ったのである。このことは、大正六年に廃刊した「雪」当時のモチーフである。文芸的日刊新聞。の発行という夢まである。文芸的日刊新聞。の発行という夢ってある。文芸的日刊新聞。の発行という夢にも、二十年の歳月をおいて一歩近づくことでもあったようだ。

画子、 つか自然消滅の形となった。 したが、同協会は戦局が苛烈化すとともにい翌年夏、水府、鶏牛子、渓花坊が会員を辞退 ンバーは次の通りである。 は同年八月で同協会の名誉会員に推薦したメ 宣言と同時に同協会の発足を明らかにしたの 初めの川柳人協会の創立の項はそれを指す。 のスクラムが当然必要な要件であった。本稿 の基盤には、往時の柳界あげての柳界トップ そのようなスケー 天民子、不浪人、久流美、 福造、 五花村、 雞牛子、 ルの大きい営業柳誌川 渓花坊の二十四名。 晟修、 東魚、 久良伎、 塊人、三太紫痴郎、濤 紫痴郎、 周魚、

にその意志を貫き通したのである。ともあれ路郎は、川柳のプロとして苦難のともあれ路郎は、川柳のプロとして苦難の

### 清 美

を受けて帰ることを作れり。 宮に到りて貴妃に逢い、 して、其魂の所在を尋ねしむ。方士即ち蓬萊 楊貴妃の死後、皇帝之を痛惜し、方士を遣は 青木―謡曲「楊貴妃」―唐の玄宗皇帝の寵姫 金かんざし並に秘語

れ初むる涙かな……。 天に在を密に伝へよや。 しとり出でて、方士に与へ給びければ…地「 シテ「是こそありし形見よとて、玉のかんざ 私語なれども、今洩

かんざしを出す幽霊はうつくしい

勅答にあたまのかざり壱本へり

天五梅1

36

岡田

### 189 あんまり沙汰がありすぎて娵こまり

紀内一とれも娵の琴であろう。客やまわりの

### 188 かんざしをしるしにもらい物すごし

青木 であろう。 者の琴の所望を「沙汰」と表現しただけの句 はらむのを娵方っくでせつかれる 左の如き懐妊の沙汰ではなきや。

というのである。 でもあること、事実がありすぎて困っている方々から嫁入り前の身持ちについての、飛ん の意である。主題句は、これと逆の場合で、い事」とは、飛んでもない事とか嘘っ八など (筥一28) というのがある。この「さたハな 西原一「さたハない事あの娵ハおれもした」 21

周囲にきがねしている句とも思いますが如何 鈴木 亭主の腎虚になるのを心配している、または す。 い得ると理解されます。バレ句的に考えれば 行いや事件、しわざ等を言っていると思いま したがって、夫婦のいとなみも沙汰と言 沙汰とは要するに城をとりまく諸々の

室山 沙汰のないことを無沙汰という。この

121

黄

迷

朗

江. Ш 木

れるので「娵こまり」なのであろう。 見るがために、親族・友人等人がたくさん訪 句のばあい、近所の取沙汰よりも、この嫁を 田 甫

求が繁く新嫁クタクタ。 の反対で、訪問が多すぎる。つまり亭主の要 岡田―鈴木説の一半、バレ句に賛。御無沙汰 入江―場面は治定しがたいが、強いて言えば 青木説のごとく懐妊か。

## 娵のうす芋かけに勝十三日

190

である。良く良く見なければ判らぬものらし じ。軽くすんだ疱瘡の名残りのうすいあばた 紀内一「うすいも」は「うすあばた」と同

うすいもはかわいらしいの内へ入レ

習があった。柳句にも多く見られるがここで 十三日のすすはきである。この日、仕事終了 また、川柳で「十三日」といえば、 誰彼となくつかまえて、胴上げをする奇 十二五

は略す。

室山─同。近くでよく顔を見た時、案外な発 「ないったが、十三日胴上げの際、つかまえたりすったが、十三日胴上げの際、つかまえたりする折に、顔の点検が可能となり、勝負がついる折に、顔の点検が可能となり、勝りがついるが、出いうことであろう。

入江―同。小僧や手代などが。 ことである。

見をすることは、

われわれでも日常経験する

岡田―同。

# 191 笹の葉へ折~~からむみたれ髪

まま句にしたもの。は必ず笹をもって舞う。その舞の状景をそのは必ず笹をもって舞う。その舞の状景をその紀内―狂女の句。どういう訳か踊などで狂女

気ちがいハ絵に書っ時は笹を持

在つ葉で行水をしておぶつさり

だったが失敗したことを歌んだもの。 行ったが失敗したことを歌んだもの。 湯立は、笹の葉でその体に熱湯を浴び、身 湯立は、笹の葉でその体に熱湯を浴び、身 を潔めて神のお告げをするをいう。冒頭句は やりすぎて失神し、背負われて帰る。 神子の髪はかなり長い。大釜の湯を体にふ りかける際、笹の葉がからむのである。 りかける際、笹の葉がからむのである。

「乱れ髪」で、『百人女郎品定』ではふつう 「乱れ髪」で、『百人女郎品定』ではふつう に結っていますが、「湯立」の時はどうなのに結っていますが、「湯立」の時はどうなのに結っていますが、「湯立」の時はどうなの調工―狂女と思っていました。しかし入江説 岡田―狂女と思っていました。しかし入江説 こく、神子が神がかりとなり、熱中のあまりなく、神子が神がかりとなり、熱中のあまり 最後に失神するのです。)

せわしなき寝耳に餅の音をきゝ

にのか。 にのか。 にのか。 にのか。 にのか。 にのか。 にのか。 にのから、何かの文句をふまえたのか。 にのから、何かの文句をふまえたのか。 にのから、何かの文句をふまえたのか。 にのから、何かの文句をふまえたのか。 にのから、何かの文句をふまえたのか。

入江—同。

38

夜ッぴとい地主の餅で寝つかれず 安五・信1

岡田一同。

# 193 ぞうげ一本に舟のよるきつい事

・をのまわりに寄って来るというのではなか遊びの三味線の名調子に耳を傾けて、他の舟ではない。

ろうか。

『川加岩京志』と圧夏司は又かられており、安四領2年かた船すてましたがと嫁がひき

で、大きな船がくるから、きつい事なのである。大きな船がくるから、きつい事はてその頭註に「撥で招いてオーイその船よせてその頭註に「撥で招いてオーイその船よせてその頭註に「撥で招いてオーイその船よせてが「きつい事」になるのだろうか? が「きつい事」になるのだろうか? が「きつい事」になるのだろうか? が「きつい事」になるのだろうか? が「きつい事」になるのだろうか? が「きつい事なのである。小さな 撥一つ が「きつい事なのである。小さな 撥一つ が「からない。」に、大きな船がくるから、きつい事なのである。

入江─『徒然草』に「女の髪すちをよれる網入江─『徒然草』に「女の髪すちをよれる網底は、大象もよくつながれ」とある。作者のには、大象もよくつながれ」とある。作者のを「きつい事」といった。

八木--諸説を合せたようなことですが、少し

あの船を寄ょて見しやうと三ッを下ケひきやむとよしののくるり川と成 九・35

であろう。

「三味線の名調子礼贄」の句とあるように、「三味線の名調子礼贄」の句

五 40

一年のドブ川に比して、何と古きよき時代よい。川はもちろん隅田川。『吉原志』の頭註はどうか。寄る、は糸の音に惹かれて舟がまはどうか。寄る、は糸の音に惹かれて舟がは余りに風情がない。

### 旅人」以後の

# 麻生路郎作品

36

## 三十八年四月号

不朽洞句帖

黙ってはいても 化石に候わず 男ごころ 白一色に凝結し 脚がオレを支えていたことに気づき 見えるかい 壕がまだ生き残っている

首相の答弁 スモッグにも似て マンホールが飛んだ何を怒っているんだ どっかで音がする きのうの足音が

本社三月句会「話術」

小卒の話術国会ゆるがせる 大阪逓信病院川柳会「日本髪」

駅長が傍系会社へ押し出され 宮様の前も歩いた駅長さ 父親に振りかえられる日本髪 南海電鉄川柳会「駅長

子の寝顔凡てをしのぐ気にもなり

### 三十八年五月号

中馬馨氏大阪市長に当選 不朽洞句帖

おてんとさま見てください我等の新市長

時の鐘これからうちで聴かれたし 前大阪市長中井光次氏へ

ぢぢばばも<br />
一票いれた顔になり

無罪となりて一ぱいの水 無罪(三句)

落ちたのかそうかと云っただけの父 無意思とはおそろしきかな人波の 恋がふっ飛んだぐらいではおさまらぬ余生 玉造支部十周年記念句会「愛情

ちさくちいさくなり母の寝姿や 大阪逓信病院川柳会「寝姿」

改札を出ると黙って荷をとられ 南海電鉄川柳会「改札」

始発駅駅長そこらに見当らず もう煙吐かぬに駅長淋しがり 本多柳志氏、終戦三部作、引用句中より

(傍 島 静 馬)

# 麻生路郎先師と私

て、麻生路郎の朱印がおされてもいる。 麻生路郎先生の書翰八葉を保有している。 麻生路郎先生の書翰八葉を保有している。 麻生路郎先生の書翰八葉を保有している。 麻生路郎先生の書翰八葉を保有している。 麻生路郎先生の書翰八葉を保有している。

少しよければ、 をよろこんでいます。 害していましたが、 ります。小生は、大楼氏より以前から健康を 松山の人)が急逝したことは、誠に残念であ からだを持っていた大楼氏(注、 五月号) も遅れながらも、 お手紙拝受いたしました。あんな立派な かし、 川柳に対する責任もあ 何かと動いています。 未だにすっかりいたしま 矢張り出 酒井大楼 せたこと るので

天眠子の誤植は、次号で訂正することにし

上に於て書く機会が来ることと思います。は別箇に持っていますが、それは又他日、 なる川 俳詩と勝手に呼称することの非礼を排撃して 訳であります。私として、 無人ぶりには、 今日迄ただ見送っていましたが、近来の傍若 ますが、それに一言もないので、 はるかに好適な川柳人協会という機関もあり われます。単なる川柳の改称問題であれば、 の何たるを解し得ない人なのではないかと思 善的であり、官僚臭の人でありまして、 いるのであります。天民子は朝鮮時代から独 俳句を混記 にはお判りであろうと思います。 動に反対しているのではありません。 私が「一つの抗議」を書いた真意は、 柳改称問題ではないと善意に解して、 (無断で) 採録しながら、それを 全くあきれたので、 俳詩に対する意見 おそらく単 私は併詩運 柳の変遷 一言した 文学 柳や

辛酸を嘗めた私は、今、それを云いた ・ でしつづけて来たのであります。つ ・ でしつづけて来たのであります。つ ・ であります。の ・ であり。の ・ であり。 ません。 る必要があるからであります。 就いてよく研究される必要がありますとだ して頂きましょう。これは一応他の 天民子一派は、 俳詩に対する意見は、 協役員のことは今暫く、 明治以後の全国川 私は過去卅五年 それを云いたくあり 確然たるものを 私個人として そのまま つぶさに 方に路

口様 玉机下

察の上御ゆるし下さい。

以上

変の上御ゆるし下さい。

の点御賢

まだ健康もすぐれず、筆を執る事に充分で

まだ健康もすぐれず、筆を執る事に充分で

筆者は、今治市での発行月刊川柳誌「みす の御他界御冥福を、謹んでお祈り申し上げま の御他界御冥福を、謹んでお祈り申し上げま をし、御冥福を祈り、合せて、麻生路郎先生 でし、御冥福を祈り、合せて、麻生路郎先生 でし、御冥福を祈り、合せて、麻生路の光 できるこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 で発行、同人よりは何らの言もこれ無くて、 の御他界御冥福を、謹んでお祈り申し上げま

かと案じて御見舞状を差出した所舞戻ったの「全焼と奥さんの火傷、何んと御見舞申し「全焼と奥さんの火傷、何んと御見舞申し

日夜。 ます。 中であります。 五丁目二五に仮事務所を設け、 じて助かり、疎開先は無疵という結果であり こちらは川柳雑誌事務所が焼失、 焼けたものはどうにもなりませんが、 日も早く御快癒を御祈する次第です。 柳雑誌は自宅の大阪市住吉区万代西 御支援願います。十一月十四 再発行の準備 自宅も辛う

ハガキ、 せられてのおたよりでした。 句あり。 と申すは、 最後に珍画珍句をご披露しまし ガキ、先生は、伊賀一ノ宮三四七に住まい 筆者の被爆後の疎開先、厳島町に宛てての 先生の酔筆の魔羅の絵、 ょう。 これ

次いて、 いて、岡田某人氏の句とんなもの僕は知らな も知らん 13

れとなった。詳しくは、旧川柳雑誌にこの件それ以来再広の機、再会の折もなくしてお別 をさし入れてのご帰阪、 らかしての盛会、路郎先生は襟に酔筆の短冊で物資不足の折柄、料理屋に芸者多数はんべて物質不足の折柄、料理屋に芸者多数はんべ 朝筆 次に、浜田久米雄氏、はてさて。 桃太郎さんへ「リウ 広島駅にてお別れ、

旧冬疎開しました (伊賀上野市の東方一 里 いるつもり。

厳島神社辺での写真も載せられて

畏兄浜田久米雄氏が

開地図芭蕉の句碑も 山郡府中村一之宮三

ガキに、 静寂、 挨拶、 麻生氏共にこられて、遂に一夜を語る段となにての六階古書展をのぞき、一路高山山上に ルにて昼食、東魚先生と面会す。南海高辺えによりて一応川柳事務所に参り、朝 本文学の会出席、久々に斉藤博士に逢い、 りにけるなり。翌朝は雨、麻生氏は下山、 明治柳壇の天才、小島善右衛門は明治四二寂、少々寒くて鼻水しきり。先づは」。「拶、午後は宿舎に訪問する。雨上り来りて 物語、昭和十三年七月廿九日。荊 一廿七日朝、 先師と葭乃様とのサインあり。 東魚先生と面会す。南海高島屋 山上金剛三昧 無事天保山着、 院内にて一泊して 麻生氏 0 日ビ 御出 Е

のかげ、よし僕が返事ヲ出サズトモ手紙クレシテクレ、喀血に我魂は蘇り、氷嚢になやみシテクレ、喀血に我魂は蘇り、氷嚢になやみがが、シカシ落胆ハセヌ、安心・ (葉ガキハ見テクレタロウ、血を吐いた、「葉ガキハ見テクレタロウ、血を吐いた、 ッタノヨ、オハリ、六、タ、金剛山デ殿リダッタ 状である。 タマへ頼ム、今思フ清滝デ飯ガクエナ 保有する。 年五月十六日長逝、 ハガキ刷り、 金剛山デ殿リダッタ、コノ時分カラ悪 六厘坊書簡、 表は玉稿の追記の 享年廿二才とのハガキも タロウ、血を吐いた、出五回忌記念のもの 豊さま」川柳雑誌社 こととわ カッ 四二

路郎先生を以て第一となす。川 川柳人にて職業川 せられて曰く、 柳人を創始せら 「川柳人協会はホントの 柳人協会をも n たの

> 会が主体となり、各地吟社の共同後援で大会 れた横の運動をなすために生れた運 愛好者達がお互に仲よく手をつなぐために なども開きたいと存じます。 ンスを作りたいと思っています。 が目的です。 (中略) 相互の親睦を図るチ 柳を社会に弘く知らしめるた ..... 動をする Ш

ずの現状、広島では、「かも」川柳誌が「ひら「文春」などには一つの川柳壇も設けられ って柳誌発行されおるの現況、誠に隆盛なが・雄山閣発行)を観るに、各地の吟社多数あ憶うに、只今「川柳年鑑」(一九七六年版 す。愚考まで、老叟の一家言です。 団結して東西二流誌ぐらいにしたい ろしま」川柳誌と合併しました御承知。 5 ので 大同

B 本の美「千一面観世音」((51 NHKテレビ放送の川柳連作 4 . 29

28

その命 樟なる一本作り 仏士術 餅つきに鐘音の添う勇ましさ 若狭から、修仁会の水の送られる \*\*\*\* 神仏にお餅供えてここ琵琶湖畔 若狭に多き シングウ寺 御 Ö 世音 十一面観世音 十一米 み寺かずし お水とりの火も燃えて おんくしび

今に伝えて

面観世音ササ エターナル

### 同 人 前月号から 吟 句 艦

# びきぐらい蟻にもいよう怠けもの

西

尾

栞

がなってみようかという作者の反骨精神が出 作者の思いであるが、その一びきに作者自身 けものがいてもよさそうなものであるという 勉な蟻の群を見ていて、一匹ぐらい、怠 不二田 一三夫

## 昂ぶりをさとす白髪の二三本

います。 とも、二三本の白髪を見つけられた主人の昻作者は女性だが、作者自身のことか、それ かも知れない、 面白い句、五句を通じて読み返すと作者自身 ても、何時までも若い気持ちを、さとされた ぶりをたしなめられたことなのか、何れにし 昂ぶりの上五が、よく効いて

### 大吉を引いて淋しくなる女

美人でもないのに、美人だと言われ、 血色

> ている。 をいじめる女、自分に酷しい女の心が詠まれ っそ、大凶を引いた方が嬉しいのに――自分 み籤を引いた皮肉が、しらけてしまって、い 時のように、大吉でない今の心境に、大吉の 悪いのに、良い色艶をしているといわれた

## 家計簿の妻の吐息は鞭である

たえるものである。 んなにか助かるのに、吐息や溜息はすごくこ てくれたり、詰じってくれたりした方が、ど とっては厳しい鞭である。いっそ愚痴を言っ 吉川雉子郎の有名な句に 家計簿を〆めて出る妻の吐息、それは夫に 田 豐

我々柳人はここまで達観したいものであ コツを聞くうちは本腰入れていず 貧しさのあまりの果は笑いあ 2) る。

初める、やがてコツは、自分で悟るものであ 入れてやろうという気のあるものは原点から タント人間の頂門の一針である。こんな人は コッだけをきいて即成しようという、インス 事を初めてもすぐに止めてしまう。本腰を 何でもないことだが、流石ベテラン作家、 井文秋

何

# あぶられてするめは急に世をすねる

急にそり返りでは、ただ単なる描写にすぎな いが、急に世をすねる、は作者の意志も発揮 句を発見して、大きなチェックをした。下五 ユーモアの少ないこの頃の川柳に嬉しい一

> で、古句の臭さがぬけている。 されて、素晴らし 別な物さしで計って満足し い一句となりました。

下五

営者の、 明日に生きる私達弱い人間である。 て、まあまあと慰めたり、満足したりして、 別の物さしをもってきて、四捨五入までし 出来ない場合がある。そんな時に自分勝手な もっているが、その物さしで計ってみて満足 サラリーマンはサラリーマンの、 八間の 病人は病人の、それぞれの物さしを 弱さをつくづく詠み得ている住 経営者は経

## 思慮深くラムネは眺め眺め飲み

慮深くという文字が、 玉をおろしては飲み。 て、一気に飲めない、玉をおろしては飲み、 もと飲んだ。然し例によって玉が邪魔になっ にかえった。一行は珍らしさの余り、僕も私 先日、ラムネなるものを久々に見て、 この場合固い言葉の思 非常によく効いて面白 童心 星

おひなさま昔話がつきませぬ 病棟の朝の話題は花へ寄り 恍惚列車にわたしの指定席がある 長生きをし過ぎた気障な合言 その他の住句 白眼視中を上司へ酌ぎ廻り 足踏みをすれば遮断機揚りそう 宝くじへ並ぶ汚職に遠い顔 顔見えぬ今もはたちの気で生きる 地球儀に平和の国の見当らず 葉 独幸秀千千太十正柳 代茂 仙生子代香津郎朗志 独幸秀



111

村

好

郎

選

### 和歌山市 樫 村 ふみよ

いめおとびな

しあ

わせになって泣い ぐに向いてさみし

てる墓の

前

追

15

かけてまで入れてやる里

帰

せり合っ

た新芽に迷う鋏置く

円満な顔し

て他人と逢う夫婦

真直

焼

てからすごく なやま

まし 君海

U へ出

寡婦も

す春

0

大阪市 1 谷 清 女

思

5

出が道に

落ちてる城下

旅の

宿

悪女にもなって時にはすくわ 着飾れば若やぐ老婆に女見る たくましく汚染の空を泳ぐ鯉

n

3

1 Ш 悠 泉

曇った日女の顔が写らない 人生の中ば病魔は容赦せず の話不潔と思う日も

した子に寄りかかる老い ふたり 備前 武

孤独へくまなく晴れ た空 和歌山

西

幸

連

休

0

昨夜の

事 儲 志れ

0

H

へ足が出 なさいと陽

た指

が昇る

本心と違う女のほめ 前例がないと役所の不親切 愛情を金に換算する孤独

言葉

Ш 上 富 子

何でとも 宝石店出る溜め息が風 なく戸 締りの出きる幸 12

ニューモー エプロンの白 現実がそこにある

アッ 3 ンショー ド若さが逃げてい く焦り

に酔う暇もなく野菜買う 町 井 上

0 ぼ る

目に青葉病舎に笑い声がする 寝返えりもたった一人の

足りて生者必滅

15

忘れ

内 堂

生き抜いた過去へ 斗病 若竹の 屋下 余生に 生きる権利小鳥も 信 父さんに叱 受話機から言 歳 拉 现 夫小口 4 別に 人唱でも 小切手の 号赤 B 友を見舞う喜ぶ 害と云う害 14 ない しを去り へ五月の太陽明る過ぎ 「の無 0 から で書かれ には余生 ひと節 b 77 とつ 数字 光陰止 からドラマの 時計をゆるく る振りで 婦唱でもよし平和 言 想 肩書 5 から がごとに た嘘は 変え 0 一葉の裏は聞こえな 17 0 てほしいことがあ がある団 10 嘘 風 出 0 める赤がな 顔 価値 語り よ 餌を要求す が たい 女が消えて から 無知をば 6緑濃 見たく 消 引 あ 流 る気魄 ボリュ 裂 され しも 卷 を知 退職 地 か か 族 17 け 7 な日 17 れ 世 曝 3 h 金 ず ウムを上げ 17 け 47 11 3 出 3 和歌山 北九州 和 U 羽島 歌 III 市 市 īħ 3 伊 津 桑 藤 原 浦 上 静 与 婦 道 春 美子 枝 史 夫 雄 銃口 不安 みかん風呂母に甘えた香りとも 其 万 商 責任のもてるお世辞を言っておふるさとの民話を亡父の声と聞 春闘をよそに汗ば 還 の身持ち知るから気になる目 曆 雷の拍手に 魂 去ひとつずつ浄化槽に捨てまし から 0 記屋もべ に の主張 を向ける標的 度父の日という味方あり から 来で草花も出番わきま 架を胸に が我が事となる木 日 お願 の模索 道 へ子に は 雌 る出出 ッド差額の いもせず喜寿に ~ され 嫉妬 々 生 本 吠えただけ 涯 L 無く平和 に鶴を折 の智恵を借 の手もまじ て狭うする む鍬を打 るでと亡母に 要る仕 0 3 着き らえる 0 組 h h 鼻 羽曳 ょ ず 姬路 新宮市 柏原市 高槻 ち 5 市 Ш 新 麻 大 西 1  $\mathbf{H}$ Ш 野 原 尾 谷 貞 MA 葉 葉 ス 7 祐 玄 香 功 子

遍路 飾らない同士で相寄る魂となり 満更でない気は隠し寄付頭 億の金貰って忘れるいい身分 軽 とはいうがうちもやっぱり塾へやる 定食をたべて脱サラ考えず 幸せなパズル埋めて行く余生 母の壷泪と汗と梅干しと 評論は易し手薄だ過剰だと 本心をためす言葉がみつからず 巡礼の鈴が寂しい島めぐり 霊場の灯明亡夫に出会いそう ニヒリストきれいに魚たべ了える 17 祈るだけが私の内助です 鏡見るよう旧友の顔の皺 い気で言った言葉を重く負い つくしみ多きエホバが眠らせず 道石仏の笑顔にむかえられ 大和高田市 寝屋川市 大阪市 鳥取市 豊中市 豊中市 柴 岸 芝 安 有 高 田 本 藤 田 原 橋 豊平次 恵美子 寿美子 鹿 路 古 の子 啓 春 海賊の島を埋めて桜咲く 人柄の良さこの人にある余裕 円満な夫婦亭主が布団 遙かなる旅路へ心の地図を描く 耐えている涙喪服へ白く浮き 計報受く離郷の不義理許され 惜しまれて去る堂々と悪びれず チャイム抑せば会社のモヤモヤもう忘れ 惜しまれてその姿どう残 入念に仮面へ仕上げの紅をひき 傘干しに花の日照権うば 捨て石にもなれず二十年 連休に自粛をせよと言う雨 脇役で一筋生きたドラマもち 連休が終るを待つよう五 へしく老いたし海のうねり見る 祝「川柳寄席」発刊 させ 一敷く 月晴 勤 カン め 寸 和歌山市 今治市 尾鷲市 岡山 橿原市 क्त 4 井 渡 松 西 井 辺 Ŀ 本

寿

子

保

夫

柳五

郎

伊津

志

松

花

草花も好きな紫紺の色揃え	泉	独身の夜がわびしい洗濯機	調子よい言葉の中に刺があり		妻からのテレホン火の用心頼みま	断層を埋めるつもりのカラーシャ	富	襟足の汚れを有髪の僧にみる	真直ぐに歩きたかった十八、九		花らっきょ小皿の中を逃げ廻り	だ	姿造りどこから箸をつけようか		ポケットのごみも一緒にお賽銭	Z	煩悩無盡これが生きてるあかしとも		毎年の顔を待ってる善根宿 ************************************	口下手を妻が補う小商人	
	泉佐野市			広島県	す	ツ	田林市			尼崎市				吹田市		いたそう	D	尼崎市			今治市
	大			原			中			大				藤		5	3	中			古
	工.			田			村			垣				原				塚			野
	静			篤						たも				世				喜			伶
	子			史			優			もつ				世史春				甲			人
岸和田市	十一面観世音心の奥を貌で見せ	ぬロッキード	大阪市	大正の父に明治のエゴ潜む		今治市	恋のマジック胸の中まで染め変える		八尾市	木の芽立ち男勝りに波立たせ	山彦よ帰らぬ友を探し出せ	尼崎市	亡き柳友へ花を捧げて灌仏会	せめてもの農手伝いと書く無職	兵庫県	浴衣縫う老妻は鯨尺使い	働ける蟻と蜂にはストも無し	大阪市	ひげ剃って来てネとパパの参観日葉桜もしっとりぬれてストの朝	宝塚市	ラッシュアワー思わず老夫の手を握る
池			平			薦			田			駒			高			欄		吉	
田			井			本			中			村			橋					田	
露子			露芳			昌道			紀美代			岳麓			近江			蘭		笑女	

断崖にいてなお花の色を選り	無駄骨へ足首までがふて腐れ		病床の昻ぶり撫でる茜雲	山脈を指呼におさめて闘病記		くらげぼこぼこ水平線はすみれ色	母の日のクレパス偉大な豚を描く		老友の昔話に酔うてみる	淋しさを振切り肩書買って出る		眼鏡かけて両眼	捨て切れぬ故郷へ墓地をつぎたし	war	喧嘩には不足ない妻と二十年	父逝きて二十六年月賦の墓		かあちゃんよ御免ね男三次会	ふくろうの生の声きく里に住み		働き蜂男ばかりでないラッシュ	マンションの窓それぞれにあるドラマ
		岡山市			島根県			滋賀県			鳥取市		て	寝屋川市			八戸市			橋本市		ラマ
		時			飯			柚			勝			福			島			岩		
		末			塚			木			山			富			田			倉		
		-			虎			踏			紫			隆			昭			天		
		灯			秋			草			宏			子			治			彦		
あの雲も二度と帰れぬ旅に行き		カッターの衿の汚れが目立つ初	ビニールの金魚がゆれる梅雨晴		大都会夜はルージュの罠が待ち	アイシャドーの奥で嘘だと眼が笑		祖母は逝く杖のにぎりに黴残し	巣立ち行く燕汝も核家族		子供等が待っていますと電話口	凡才も秀才もない子供の日		うっぷんをピアノのキイにぶっ	二号炉のうわさわかめも泣いてい		土いじる手に六月も近づけり	汎鐘の一ツ鳴らせば家内無事		駄馬の汗春爛漫に遠く居る	一雨に万緑一刷毛濃くする	
	唐津市	初夏	れ間	唐津市		笑い	唐津市			唐津市			七尾市	つける	いる	松江市			羽曳野市			岡山県
	田			桧			Щ			岩			松			梅			岩			池
				垣			下			下			高			本			橋			田
	中																					
	中紫			岩			勝			照			秀			登美也			双			半

伸ば す芽と摘みたい芽とを子に見 つ 島根県 け 松 本 文 子 石仏の伏し目へこころゆすぶられ 夜漬男独りの手に慣 n 3

惜別の彩がしたたる山スミレ

ふと我に帰える日暮れは優しすぎ

大阪市 那 須 鎮 彦

大阪

市

村

島

秀

村

母

寝込み結局なにも出来ぬ父

花水仙生ける女の白

い約

七夕の笹に悲恋の 鶴が居 3

長生きへ市長も晴れやかなプレ ゼント

大阪市 内 藤 ま いすえ

御先祖の命日お経をプレゼント 久し振り会うて互に老に驚く

大阪市 本 炻 斉

老人に 贈り物したいが 暖 かい日 人目が気にかか のプレゼント る

大阪市 須 浦 0 ね

Ш 喜代子

西宮市

5 折

0

H iz

お 肩叩 き

のプレ

り紙で遊んだ思い

出 遠 ゼ

い 夢

肩掛 けの暖たかさ娘のプレゼント

折

紙の風

船低く孫とつく

津山市 木 F 水

保

補償額やっと煮つめた遺族会

火の

つつい

た目刺し嚙

って独り酌

to

出来すぎた嫁に姑の肩がこり 真っすぐに歩いて独り残され 3

鳥取市

岸

本

無

人

倉敷市

松

井

俊

風

苦しかったことを笑える歳となり 迷信と笑ったみくじ気に かかり

十円がまだ生きている赤電話 正 8

新潟県

高

野

不

笑顔する難しさ知る朝鏡 うす着して鏡にポーズとる若さ

泥の手で摑んだ珠玉も泥まみれ

八戸市

安

紘

こどもの日せめ てこの日は父とな b

2 嘘と知り乍ら女房妬いてくれ h

尼崎市

中

谷

利

美

いきに酔うてジュースも浮 n 岸和田市 出 U

池 田 香珠夫

則 - 36

今治市

還

部

正

定年がきまり中元がたと減り		寝ころべば一面の空われのもの		来る来ない花占いの娘がまぶし		老眼に「健康欄」がよく映り		再婚ばなし女にかえる一瞬時		優勝の崇徳祝し百貨店		雑誌にはもう夏が来てまだ脱げず		憲法はタブー記念日遊ぶだけ	一族の和で乗り越えた小企業		妬心無きに非ず無駄腹立てぬだけ	連休の最後の奉仕子供の日		結婚の遅れ悪阻で取り戻し	子供の日親の沽券を賭けさされ		
	唐津市	1	唐津市		松江市		堺市		堺市		広島市	2	山口県			今治市			今治市			今治市	
	田		岩岩		岡		栗		堀		石		高			真			伊			大	
	П		崎		崎	- 6	本		畑		崎		崎			山			藤			本	
	虹				雪		藤		日		柳		雀			国			_			バ	
	汀		実		美		持		日子		石		声			彦			郎			ット	
	重い荷を若い気で持ち腰いため		連休へ僕は我が家でワイン抜く		沢庵も底になる程味があり		明日は発つ子連れ巡礼ねぎらわれ		メーデー旗みどりの風と遊んでる		末席に座っていればそれでよし		息抜きも知らず曲がった母の背		みちのくの月へ想いを馳せる恋		病窓を抜け出すデートにあるスリル		負け犬と知らず手加減せずに責め		知らん顔するのに便利なサングラス	河内	
		大阪市		唐津市		青森県		松江市		大阪市		島根県		今治市		竹原市	ル	鳥取県		鳥取市	ス	河内長野市	
		野		Ξ		荒		黒		松		高		原		大		加		水		井	
		田		浦		田		目		本		見		田		島		藤		井		上	
		きみえ		ひろ坊		つ		大		前久路		鐘		琲珈俚		花		茶		節		喜	
		え		坊		る		鳥		路		堂		俚		炎		人		子		酔	

# 由人一首と川 窗七野鞍馬

徳 院

瀬をはやみ岩にせかるるたき川の われても末にあはむとぞ思ふ

仁といった。保安四年(一一二三)五才で即 崇徳院は、鳥羽天皇の第一皇子で、 名を顕

かなわず、長寛二年(一一六四)四十六才で となり、 について、翌保元元年(一一五六)保元の乱 れ「新院」と称された。ところが久寿二年 位された。在位十八年で、近衛帝に位を譲ら 崩じられた。白峯の山陵に葬られた。 に遷された。しきりに都へ帰りたがられたが 徳上皇方が敗れて、出家はせられたが、讃岐 (一一五五) 近衛帝が崩御になり、その後位 (崇徳の皇子重仁と弟の後白河)崇

> と西行法師(円位)もそこへ参拝している。 るものと思っている人が多かった。 してあるので、金毘羅大権現とは崇徳院を祭 そして讃岐の象頭山の金毘羅大権現に合祀 百人一首金毘羅様に気がつかず

小倉山なかに十日のくんじゆ有

を、 と川柳にも詠まれ、金毘羅の縁日は十日であ 菅原道真が雷となったというのとを並べ また崇徳院が天狗に化したという伝説

院号の付た天狗は雲の上

麴丸(八九38

雷も天狗ももとは雲の上 幸司 (1005)

白筝の御廟円位のかこち顔

神鳴と天狗となりし御鬱憤

飛鳥(七四23

雷天狗除くと九十八人首

雷も天狗もまじる百人一首

から 十日が金毘羅、二十五日が天満宮の命日だ

命日のしれたが二人百人一首 口 (宮四15)

二十五日と十日をも百へ入れ

素見 (筥四12

扇松 (一四〇8

とも詠まれている。

この歌の文句取りに

割れても末に風流な額く木鉢

瀬を早め岩に当らず届く神酒 錦糸 (一四〇1)

という句もある。

三朝 (一四〇1)

18

## 七八 昌

あはお島かよふ千鳥の鳴くこゑに いく夜ねざめぬすまの関もり

この歌に対し川柳は

千鳥に夢を破られる須磨の関

一九23

通ふ千鳥のなく声は遺手部屋

梅島 (八七20

聞て惚れ見て又惚れる淡路島

(武四41

一首の後に見えるあはお島

風松 (一〇四2)

などと詠んでいる。 淡路島は、徳島蜂須賀侯の家老、 稲田九郎

兵衛の領地であったので、 御家老の知行百首の内に入り

稲田九郎兵衛が領地も一首入れ

八2

5

荒海へ千鳥の鳴くはいなだりやう 10

御家老の知行公家衆の口に乗り 雨潭(傍二6

九郎兵衛が寝覚めまじまじ聞千鳥 鼠六 (一三八16)

残念さ稲田島とはいはぬ也

(雨潭 (営初34

稲田が領地へかくれ行を惜み

人丸の歌「ほのぼのと明石の浦の朝

していたのは珍らしいことであった。 数々の川柳が詠まれてある。家老が一 后宮大進であった。天永三年(一一一二)に 源兼昌は、美濃守俊輔の子で、従五位下皇 霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ」 国を領

七九 左京大夫顕輔 三十九才でなくなった。

あき風にたなびく雲のたえ間より もれ出づる月の影のさやけさ

堀川、 藤原顕輔は、正三位修理大夫顕季の子で、 鳥羽、崇徳、 近衛の日朝に仕え、正三 新古今集

雨譚 (筥初15) たのである。

もれいづる月を見て焚小豆飯 たな引雲の絶間より月はばあ

初潮祝

ながからむこころもしらず黒髪の 八〇 待賢門院堀川

みだれて今朝は物をこそ思へ

えていた。 れていた。 川左大臣と呼ばれていたので「堀川」と呼ば 堀川は、 鳥羽天皇の皇后待賢門院璋子に仕 神祇伯顕仲の娘で、祖父の兄が堀

この歌は千載集恋の部に「百首の歌奉りけ

てある。 る時、恋の心を詠める」と詞書してのせられ

今治市

月

原

背

明

川柳はこれに対し 黒髪は乱れぬ御代の御霊場

·近

人間に保護色がありあい単衣中年の無聊を豊満とも言われ

遠巻きで犬人間を信じない

作•

散髪屋頭の渦をほめてくれ

利用するつもり母校の名簿繰る

今治市

Ę

野 文

庫

いさかいの上に和の字の額があり

日光黒髪山

魚有 (七三38)

六十六才でなくなった。 位左京大夫となった。久寿二年

で、和歌の一流を立て、六条家の歌祖となっ 一)「詞花集」の選をした。烏丸六条に住ん 崇徳上皇の命によって、仁平元年(一一五 川柳はこの歌の文句をとって、 (一五五)

十九(八七34

39



### 正 水 選

生と死に挟まれ 見送りを気付かず妻の後ろ影 人は 歪められ 青森市

追われ蝶 淑女の走るさまに似て 岡山県 出原 工藤 甲吉 敬

春夕べ ーネイ シ (慕わしき曲 13 ンもらうと母になれそうで を聴く 藤井寺市 貝塚市 西 高橋 野坂つき子 いわを 夕花

八尾市

あ あ蟻よ ゆっくり歩けぬのか蟻よ 岡山市 竹原市 三宅 船越 洋之 不朽

13 つまでも眩しい女で人妻で 京都市 松川 杜的

句集半読のままでよし書架楽し 都会には山 彦がない から帰る 和歌山市 津田 与史

チュ 1 1) クッナ畑 音符の 花ざかり いつも哀し 出銀市 神戸市 小浜 高見 牧人 鐘堂

跳ね回る小鬼さながら章魚を干す 貧しかりし母の思い出 岸和田市 大阪市 池田香珠夫 神夏磯道子

なめくじの鈍さ 最短距離

最短距離を知る

和歌山市

若宫

武雄

振り向いた顔は

まぎれ

もなく他人

香川県

三井 沢山

酔夢 福水

和歌山市

沈黙という手で孤独に耐えているふたこと目には金々と妻も老い

倉吉市

奥谷

弘朗

コロッケが好きで二階に住む夫婦灰皿の中に記憶の海がある

八尾市

香川

酔々

少しずつ心を開く花いとし急流の底を見せない水の貌

坝

त्ता

高橋千万子

宝石の匂い

,金庫

0

中で消え

花冷えへ母は 唇の 少年 好物が出て亡妻想い出 薄 期 い仏に智恵願う 或る日突然貝となり 枚余計着 せせ 今治市 高槻市 大阪市 若柳 園部 JII 口 弘生 正則 潮花

ずぶぬれで這入り茶店の端へ掛け

倉敷市 伊丹市

> 藤原 黒川

漫柳 健史

何よりの見舞

肚から笑わされ

勝

Ш

紫宏

友人がまだ愛称で妻を呼ぶ

棺に入り語りべとなる腕時計

今治市

原

琲 如理 紫香

薔薇揺れて悩みを聞いてくれた貌

複雑に生きてゴールを見失い 西

幸

さりげない話の 中にある重味 草深

逆転 気分一 火をもやし水を使って和紙生きる 新スト それから女化粧する から自転車で通う 島根県 滋賀県 八尾市 岩田 宮西 柚木 三和 弥生 酔升 踏草

薫風の夕陽へ全身吸い込まれ 花に似ぬ大きな実結ぶボケである 和歌山市 島根県 松原 榊原

疑って見ても西へ陽は沈む 晩婚の倖せよこす和紙は佳し 島根県 倉敷市 堀江 高山みどり 朗

鵜が噛んだ赤い血 お茶漬の腹で他人の世話が好き 0 まま鮎を焼 倉敷市 今治市 小幡 真山 里風 国彦

この美味い刺身に海の 冷たく孤をえがく 深さかな 島根県 備前市 武内 堀江 雅堂 芳子

主張する女

今治市

伊藤

郎

よろこばす嘘へ老人逆わ 鮫皮を当てて人形の肌磨く ず 羽咋市 路根県 三宅 小砂 ろ亭 白汀

間に合わないのでご注意ください。本社宛に送ってくる人がいます。締切に本社宛に送ってくる人がいます。締切に本社宛に送ってくる人がいます。締切に

人生の余白を無為で塗りつぶし スト明けて銀杏並木は初夏の彩 お土産を買うのが何よりたのしみで 藤棚をきれいな笠としたひる餉 お化粧の下から女ふけて行く 七人の敵から目配せされた終業前 春風の砂丘 三十二年の宝石 律義さが似た分身の古時計 さなきだに淡い藤色雨溶かす 何も彼も五月にしたくて藤の午後 恨むまい子にも親選る権利とか 陣笠の無口は腕を組むばかり 始発から平常ダイヤと聞いて寝る 天人が舞下り酒が廻って 町会長半身に構えまだ若し 新じゃがと新玉葱の薄い皮 口答えの娘へ猿轡ともゆかず 風紋は 妻ありがたい有難い バレリーナ 富田林市 東大阪市 大阪市 今治市 大阪市 大阪市 大阪市 松江市 松江市 大阪市 貝塚市 唐海市 西出 推る 月原 西川 岩田 藤 竹中 竹中 新川 蔦本 桧垣 松本甫久路 宮尾あいき 直原七面山 新岡回天子 田 頂留子 千代 貞祐 昌道 岩光 宵明 誓 雪美 祥月 肖 綾女 美代 栄 受け売りの話はとかく尾鰭つき 秒針に似る人生のつつがなし 老いて見る山河 幾度の花に逢えるか注射うつ 海峡に江差追分溶けてゆく お遍路の鈴を吸いこむ 肥えるのが判るほど食う回復期 恋を恋う男で少し孤高めき 北山杉ラインダンスをしてござる 六法に最後の弾丸つめてある うなずいただけで言質は与えない なる様になると年 まばたいて見る大空に叱られる 老妻にまだきれいな声の子守唄 汐ピタリ止ったところで飯にする 首を振る蟻の言葉が解りそう 瓢々と蝶の軽さで老い行かん 行く末には触れず 寄り言い放し 深みどり 羽曳野市 岸和田市 羽曳野市 今治市 豊中市 今治市 唐丰市 小松市 尾鷲市 松江市 唐津市 和泉市 島根県 大田市 鳥取市 麻野 飯塚 塩満 高橋 今井 岩下 岩崎 河村 渡辺伊津志 池田 梅本登美也 古野 田口 桑原 藤田軒太楼 大路 魚山 幽玄 虎秋 露子 伶人 虹汀 道夫 古啓 松花 照冲 美幸 日満 敏 実 大銀河 帰省子へ妻はあれ食えこれも食え 少しカットして映倫が許可をした ボ 汗した日 つつき合う鳥五月の P 締切毎月十五日 **T** 5 4 6

物忘れ心にすきのある男 底辺に生きる運命花愛 八戸

iti

小泉

紫峰

親切を無視され席は空いたまま 国跨いで流れけり 羽曳野市 美雕市 今治市 岩橋 原田 安平次弘道 双虎 風

風呂がこんなに嬉しく 陽がまとも 岡山県 池田 仙

7

" 1

どの家の女もミシン踏む長屋 老けし顔に若き面影探り合い 時計五分進めて朝を出る 松江市 大阪市 高規市 豊田 大本バ 黒田 出田 巡步 真砂 季賛

佐々木静泉

川柳塔欄などへ投句したのと同じ句が眼に出柳塔欄などへ投句したのと同じ句が眼にも書いたが、その意味からだけででも前にも書いたが、その意味からだけででも安易な同一句の出句は自分を貧しくするものであると思う。

#### 投 句 先 き は

電話大阪・703・3046 大阪市東住吉区湯里町1の25 人三句以内)

### 水 煙 抄 句

### 前月号から Ξ

井 酔

# こんな時母の強さをふと思う

母の強さには負けたと思う日がある た母を持つ私には、作者の意図とうらはらに 輪廻かも知れぬ。子を捨てて自我をつらぬい母の芯の強さを悟るのも、女にとって永劫の 面してさえおろおろしてしまう。あらためて われと思っていたのに、些細なトラブルに直 何かが起る。長い歳月、古風に生きた母をあ を展開する。平凡な家庭生活にも或る日突然 呟くようなこの句、さまざまな人生ドラマ 清女

# 花吹雪花のしとねに死ぬもよし

ているだけに、安易な句では到底及ばぬとこ 桜は日本のシンボル、昔から名句が残され 史葉

が花散るや伽藍に枢おとしゆく。 \*木のもとに宿りはすべし桜花 凡兆

> の句有情と無情が巧みに表現されている。 今も昔も落花に心ひかれるは同じだが、 ちらまくをしみ旅ならなくに 金槐集

## 溜まる不満で風船をふくらます 江口

度

……e t c …。スカーッと爽やかなことは無 やるせなさ、ピーナッツーコー〇〇万円、ロ ど物価はうなぎのぼり、スト出来る人を羨む ですが……。深呼吸して作句しましょう。 飛ばしたいのだが空もスモッグ。例えばの話 しなさ、エスカレートした暴走族の人殺し… いものか。せめてふくらました風船を青空に ッキードは暗闇で、国会はうちわもめのだら 世の中どうなっているのかな。働けど働け

# 散歩道けさは不幸のあっ

えのことだが、人は永遠を錯覚し明日を信じ ばりを見た。生あるもの必ず死すはあたりま 人か、事故で散らした青春か、知るよしもな て生きなければならない。天寿を全うした老 つも通る見馴れた風景の中に、けさは黒いと いこの家の仏に、残された肉親に、 したに違いない。 淡々とした句に作者のおもいを感じた。 堀口 思わず合 ι

# 寂しさのあまり鏡へ笑ろてみる

るやも知れず、しかしこの笑いはうたかたの このさまを複雑怪奇とおっしゃる男性があ

> 5 の、寂しさが一層つのる女心なのです。 "貧しさもあまりの果ては笑い合い"

ざ知らず、 知れません。 視点は異なりますが、モナリザの微笑はい 人間極に至れば笑いとなるのかも

# 追うて巡り追われて巡る木馬だな

頼もしく思う。 わる木馬に、人生の縮図と哀欲を見た作者を なった。 を卒業している。追いつ追われつぐるぐるま 恋を語った遠い思い出、あるときは詩人にも 淋しい昼の遊園地。 瞑想にふける作者はセンチメンタル 幼き日々はメルヘン、

# 恋せよと春のポストが立っている

若さをひたすら羨望 軽いタッチ。ポストのおしゃべりを聞ける 桑原 道夫

# 制服をぬぐと巡査はよく笑い

姿にくつろいだおまわりさんは善の人。 衣服はときに人間を委縮させる。ステテコ 梅本登美也

# ご協力願って線路歩かせる

# 年度末あちこち道路掘りかえし

藤原世史春

かい馴らされた年中行事に一矢を放つ。 芳仙

## P アー

#### 直 原 七 面 Щ

がプラスアルファーの句として優秀だと言 どの句を見ても柳味が全然認められないので 0 てくれたんですが、とのこと。そこで私は次 ように話してみた。 柳は一句も無いよ。と言うと、 で自信作十 が人を介し 句を見せて貰った。 句を見てくれと言っ ところが T先生 5

に増え、川柳の"せの字》だけしか知らない足りていたんだが、戦後川柳をする人が急激 多くの新人達が、 い込んで、この民主主義の時代に、 の上斬新ささえもある(句の内容は別にして む必要が無いので句は至って簡単に出来、そ とで句を作ってみると、三要素を全然織り込 らは早速この言葉に飛びつき、この考えのも ファーと言う言葉が流行って来た。そこで彼 を覗けてみるんだがなかなか句が抜けない。 あ れこれ思い悩んでいた時丁度プラスアル 柳界で冷や飯を食わされていた人々を誘 前までの川柳は、三 あーこれだこれだと言うことになり 暗雲にあちこちの句会に顔 要素で全てことが 何故川柳 とは、 れたり、 うな、そんな大きな(文学作品としての) それは限られたグループ内だけのことであっ き目に見ても。 は全然持ってはいないんだよ。どんなにひ の中に、感動と共感の嵐を巻き起こさせるよいつまでも人々の記憶の中に残り、人々の心て短かく、三要素から生まれた名句のように 命も(宿命的に)虹か線香花火のように至っ て、 ー句が名句としてもてはやされたとしても、 その句が柳界全体から名句として認めら これは金輪際無いんだよ。また句の寿

がいつう いつの間にか柳界 こう主 の片隅に定着して今日 L し、 その

 不明の浮浪児なんだよ。だからもしアルファーのが無理矢理に居候を決めてんでいた。なんなら他の柳人に聞いて見給えたとですか。と。恐らく今の川柳界に "それたれこれこうしたことだ"と判然り説明出来る人は一人も居ないんじゃあないだろうかいわばアルファー句は柳界の暴れん坊で正体のいわばアルファー句は柳界の暴れん坊で正体である人は一人も居ないんじゃあないだろうかいわばアルファー句が無理矢理に居候を決めてんでいた。 も、 元来同居すべき性質のものではないのに、 種のご都合主義で生れて来た)から言って 出来のいきさつ(文学的理由からではなく 今の話でも判るように、 本格川柳とは根本的にその趣きを異にし アル 7 7 1 句 2 7

考え方 12 なってしまうよ」……と。 ひいては宿願の "いのちある句 し、また川柳史の上に君の足跡も残らないし なんだよ。でないと、 君 探求に注ぎ込んで行って欲しいと言うこと のもてるそ 全て 0 君の柳魂も 情 熱を、 も作れなく

磨かれない

きつ 私の目には不満げに写った。が、 A君も一応聞いてはいてくれたようだが、 と判って貰えるものと思っている。 いつの日か

### 盗 聴

## 或る柳人達の会話 から

A 此 きた。 0 頃の川 妙にド 柳は、 ロドロしたものが流れていて だんだん難かしくなっ

#### 及 黄銅六角 U 特 西出 ボールトナット 物 全

推賞されたりするといったようなこ

螺子製作

TEL 大阪市天王寺区空堀町 夜間 (762)(761) 三四五 PU 74 = ~ 八番地 四

けがいつまでも古い殻に閉じこもって三要

点張りでなきゃならないんだ。プラスア

があって然るべきだよ。

がおおそう

37

ついてアルファーの句など作ることなく、

く、そして遠く苦し

かろうとも、

決して易き

柳の道が如何に

みたいことは、

そこで、

、私が先輩として君にんだよ。どんなにひい文学作品としての)力

Cん、それなんだよ。川柳にも頭でっかちの B芭蕉や山頭火に習えとは言わないが、 で書いたものだ。 もともと俳諧は、足で書き、 火星人のような作品がたくさん出てきた。 目で書き、耳 もう

Cたいへんなことになってきたぞ。 A第一川柳人の平均年令が高過ぎる。 Aボクはね、 このままでいく と川柳は滅亡す ると思うんだ。 これは

少し肌で書いた川柳が欲しいなあ。

Cそして、若い人に愛される川柳をつくらな ければ。 人を育成しなければ。

致命的なんだ。今すぐ吾々は、もっと若い

C実は、ボクも学研の学習百科大事典を見た Bボクの子は、中学生なんだが、 いと言うんだ。 が川柳をやっている」と、何故か言いにく 川柳翁も剱花坊も、三太郎も路郎 「お父さん

Aそこでだ。 ほんとうの意味の文学的 川柳でもいけないし、詩や俳句まがいの川必要になってくる。いつまでも前近代的なそとでだ。ほんとうの意味の文学的川柳が も載ってないんだ。 柳でもいけない。

Cわかる。 わかる。 第二だね。 それが君の 川柳滅亡論

> チ F,

ッ子の奇

術を

Bそれについてはもっと聞きたいが A簡単に言うと、 の滅亡要因はなんだね。 1.

は亡びると思うんだ。 船頭ばかり多くてもいけないし、 してはいけないということだ。 他を排斥し合ってばかりでは、いつか頭ばかり多くてもいけないし、柳論的にはにはいけないということだ。組織的には早に言うと、川柳を一部の人の独占物に

C異論はあるが、警告として川柳人は心すべ は、 きてとだ。まあ、 滅亡しないよ。 人間が存在する限り川柳

### 夏の風物 . 風鈴

車

に当ると実によい音を出す。私も今年購った ス製であるがやはり鋳物の方が鳴りのよいの 大きかった。風鈴はセトものか鋳物或はガラ まり変るところがなかったので風鈴の効用は くとも昭和初期以前の耐暑方は江戸時代とあ

いのに当って、音痴の私にもこころよい音を 南部鋳物製のものの音は久しぶりにそれらし

ろう。 江戸時代では一般庶民は床の低い長屋のひし なりぜいたくな、江戸っ子らしい銷夏方であ 米が一升百六拾円したところからすると、か うのがある。当時の一文は今の約四円であり めく中のくらしでは風鈴でも吊って、そのさ 古句に「風鈴の下に一文世をのがれ」とい 風鈴は今は風流の意味しかもたないが

#### 初 心 者 歓 诇

規則書呈上

ほめる審査席 大阪市南区大宝寺中之町一 (悠泉

術

TELM七一二八

いうものである。現代でも一般的にはすくな ったのであろう。いわばくらしの知恵とでも やかな音色でうさをはらすより、 てがなか

わ

した、とものの本にある。 だけで売り声は出さなかった。また夜なきそ りして普及した。江戸時代の風鈴売りは音色 たとされ、室町時代には茶室の軒につるした 伝えてくれる。 因に風鈴の由来は鎌倉時代からすでにあっ

風鈴の音お遍路の鈴かとも

ムードをもっているのはどうか――という声いか――つまり七人だけで他を寄せつけない

大方諸賢の共感を得た反面、

この会を構成し

ている七人のさむらいが余りに偏狭に過ぎな

5

れ

われの

「川柳塔まつえ」誌上を毎号

せていただいた「川柳塔巻頭句を斬る」が

### h 角

### 111 晃 男

当時 を聞くようになった。 った為、 U る。 をそのトレードマークにお借りしたまでで これに対して弁明すると、 の結社からさえお出かけ下さっているし、 て七人制を固持して来た訳ではない。発足 為、映画監督黒沢明氏の名作「七人の侍「川柳塔」の在松同人がたまたま七人だ 希望者があれば何時でも仲間に入って わ れわれは意識

雑

しかし、

緒に巻頭句を斬る場合だってある。

と考慮中なのである。 ネリを脱して 輩諸氏の御教示御支援をお願いします。 い企画を打ち出したいもの

# III

関

りで、私を除いてはトップクラスの人々だっ と各校三名の参加だったので総勢百余名の集 断り 子供二人を人質に取られている母親としては た。例年の事ながら学校から依頼されると、過日、市のPTA連絡協議会にかり出され その会は学校長、PTA会長さんと母 切れなくなって重い腰を上げるのだが。 現代表

> 15 答や討議の素晴 ポジウム形式のものだったが、熱心な質疑応 午前中は休憩なしで三部会に別れてシン しさに目をみはった。

ったが、その前の自己紹介の場で私はがっか全体会議となって文化講演なども聞かせて貰きて午後だが各分科会を解かれ一同同席の りしたことを書きたいと思う。

とき、 主婦、 んと銭湯のおかみ、魚屋さん、時計屋さん、とき、床屋の主人、平教員、洋服の仕立屋さ舎の川柳愛好会のメンバーをふり返ってみる った。百人も集っているのにと嘆く反面、 短歌の名だたる人々がやたら出てくるのであ 続けたのだが一向にいらっしゃらず、 したらという期待を持って名前とお顔を追 じてしか知らないのでもしこの中に来ていら出不精の私は当地の柳会の面々を紙面を通 大店の番頭さん達であって、 このトッ 俳句、 in

## 分間の 柳論

して川柳はこのドラマを深く広く物語っはこのドラマの記録であると思います。 くれる短詩文芸であって、流動する社会人 ず多くの柳友と手を握り、 表現していくのだと思います。 間動静を川柳眼で捉らえ、 を感謝しております。そして流派を問わ私はとの道に入り情熱をかけて暮せる倖 人生はドラマだと言われていますが川喜 移りゆく社会に 様々なかたちで って 7

という訳で、当分はこの七人が従来どおり

任に当たらねばならないけれど、川柳道

大いに開いてゆくつもりでいる。

ねて一つの曲り角に来たわれわれ、 々たる小誌の歩みとは言え既に四十一号 増して経費の捻出が必要になる。

ば会誌の編集者・印刷発行人が、否それに

小さくとも会を運営してゆくとす

# 数千代

が作りたい。とそんな夢をもっています。おくれず社会へ浸透して読者を魅了する句 を吸収、 郎 りたいと、 そして伝統川柳を足場として革新を詩川柳 3 る」を心の糧として、 |た生のお言葉「川柳は人間陶冶の詩であります。路 努力している私でございます。 ミックスさせて個性のある句を作 悔いのない人生を送

とって

おいでだし、

皆さん川柳欄に目を通し

きたい旨話し乍らも、夕刊はたいていの家で

紙とエンピッがあれば出来るから始めて戴

戴いたら川柳人口云々と騒がなくてもいいも

て下さるとすれば読者から作句者へ変身して

秋 た」と「あれを読むのが楽しみで」であった さんも同じで、 っしゃる事の又、校長さんも会長さんもお母 通していらしての言葉なのだろう。そしてお ぞと言う意味でローカル紙の夕刊の川 を書いておられる関さんですね」と来た。 7 11 だが行 で投句するものだから、皆さんそれに目を 私は私でも作れるのですよ、皆さんもどう ところがである。 クラスでそれを探そうと考えた私がお のかも知れないと諦めてしまった。 席もうけられていて、ざっくばらんな親 われ、その席では、 「どんな方かと想像してまし 会の最後に反省会と称 異句同音に「川

柳欄へ

柳

まな詩が流れて行った。 た夫の車に乗った。窓の外には生活のさまざ ておきたい気もしながら、 関心を寄せて下さる方すべてを川柳人口としての際、例え興味本位でもいいから川柳に のをと思う。 迎えによってくれ

## 九七六年版

### Ш 柳年 鑑 カン

本社関係の作品

柴田午朗 っている。(写真提供・不二田一三夫) 村半文銭氏の写真が麻生路郎先生の写真にな 公募作品入選」 "人生" 選者— 西日本の柳界を支えてきた人たち」の 佐藤正敏 木

L

カン

L

エンゼルの背中ばかり見て暮らし 積木積む腕が止っている夫婦 倖せと思えば足りる箸をお 羽形 高杉 鬼遊 緑水 园

しまい風呂今日を心に問う鏡

瑞

枝

月九八頁

三〇〇円。

あ 耐えている寒水仙は母に似る 滝に落ち岩にくだけて水が澄み 来る嫁に妻それとなく身構える じさいの今日咲く色も嘘でなし 会、選者 然, 選者—大森風来子· 竹田花川洞 · 堀 横高 薫風 豊治 美幸 弘生

霊山の静けさキャンプ寄せつけず れても崩れても砂は生きている 檀野 茂子 功

柳界概況」《四 枯色の蟷螂お前も更年期か 散る花の愁いにふれず宴佳境 残雪に立ち掌のあたたかし 国、執筆・月原宵明。 高橋 安藤寿美子 夕花 酔夢

一三夫氏二女)

川柳」留廿五篇研究。。 古川 日本川柳協会発足について」中島生々庵 柳研究活動」 ―岡田甫ほか 。誹諷柳多 富士野鞍馬 「百人一首と

佐 理十占

「面影はまだ消えやら

冊百円、 送料二

7

百円、 一冊千五百円、 送料二百円

料

古薩町春光寺境内。 ず曼珠沙華」 刊行物 阳 永宗宗義 和 74 九 . 高 74 瀬 . 舟 t 熊本県八代 四九 年 市

花 あの事は記憶の中へ鍵をかけ 八月の雲にヒロシマ痛くいる 一九七五年版川柳年鑑作品評 咲いてとなりへものが言い易し 高杉 独仙

ー溢れんばかりに纒綿としていて、追憶の詩がる。桜ん坊が好きで頸が細く痩身であったがる。桜ん坊が好きで頸が細く痩身であったがる。桜ん坊が好きで頸が細く痩身であったがる。桜ん坊が好きで頸が細く痩身であった 現代川柳の三つの流 桜ん坊の頸の細さよ懐しの人 流れから 女の訃よ 麻生 福島 葭乃 政真柳己澄志

とになります。 をしないと、グルー ▼グルー ブをおもちの幹事の方が怠けて通 プ全員の句が載らないこ

を実践しましょう。 蠟燭は自身を燃やして他を照らす

実

ありし日の十止庵氏 (S42 · 10 · 14)

が私の脳裏に彼とのつながりの過去が走馬灯く見たい」と書いてあったのに、その十止庵 にもっ 気になっているらしいと、 大阪句会への投句もあり、 さんの悲報を聞き、 二日午後二 激励してくれた柳友達の顔を一日も早私もどうやら社会復帰が出来そうで嬉 時頃電話で鬼遊さんから十止庵 耳をうたぐった。最近東 私の旅便りの返信 柳友諸兄からも元

がとても上手でなかなかの健吟家。 学友鯉昇を連れて常連のようによく句会へ出 ていた頃だ。学生服姿の丘遊舟 のように浮かぶ。 になれていつも駄洒落を放していたが、 彼とは四十年ほど前からのつきあ 小松園さん達で「川柳若葉」をやっ 歳もさほど違わないので仲良 (十止庵) い が

# 十止庵氏逝

会う事もなく文通もなく数十年過ぎた。 て故郷へ帰ってから、戦争や何やらで彼とは い線の細さはあったが、 私が事情

ふあうすと、番傘各誌を見ても大江俊夫の名は白柳さんは亡くなった。彼は昔ながらの健は白郷さんは亡くなった。彼は昔ながらの健の本社句会で彼に会った。彼は昔ながらの健い事が、私は少し恥しくなった。その頃でも嬉しかった。川柳にも少しなれて来て本ても嬉しかった。川柳にも少しなれて来て本 が私を忘れずにおぼえていてくれた友情がとやその後の事がコマゴマと書いてあった。彼の名で便りをくれた。昔のなつかしかった事 でよく投句している。富柳会、南大阪、 出席するようになったある日、 祭にもよく彼の名をきくようになった。彼と の友情も昔以上になっていた。 阪ほかの川柳塔支部の句会にも、各地の文化 柳に復帰して玉造句会へぼっぽ 、彼から十止庵 つと

彼の入院の事をきかされ、見舞の便りも、 ていたのに。 書きも、旅だよりも、早く良くなれと祈っ 二、三度句会で会わななくなったある Ę

私から古い柳友の灯を一つ消した。私に川柳 川柳に戻れる日の近いのを喜んでいた彼が

> てくれた十止庵の霊よ安かれと祈る 作家として彼が数多い名句秀句を残して行

た最後のハガキ。 岩本雀

家族も困っているようだ。では又、 アタマをやられているらしく物忘れがひどく ように句が作れるか、どうか不安だ。 友たちの顔が一日も早く見たい。しかし元の くおもっている。いろいろ激励してくれた柳 だ。私もどうやら社会復帰ができそうで嬉し 愉しい旅信、 あり がとう。元 だいぶ

# 上稔夫時代のこと

かった) 紙の同人だったが、氏は当時から一疋狼らし う二十七、 阪上稔夫の筆名で夕刊紙で活躍していた。も ぼくが " 八年前のことである。 ウソ物。をやっていたころ、氏は (ぼくば二

名は慢性心不全だった。 日に新大阪病院に移る。 2日午前3時35分死去) 1月14日に近くの愛染橋病院に入院。 本名は俊夫。 死因は心筋硬 6月 病 24

4年6月

この命捧げるひともなくて春 どこかへの投句か「命」 命まで取る強盗の怖い記 救急車命の限り抜いて行き 柳塔柳箋に書かれてあった。 の題

紙

たされ

時

を

L 間を折り

4

ts

を折り続けて呉れ

代仕男 宏

集合場所

南海本線難波駅西改札

П

九時

七月八日

(木)・

九

金

げ

る鶴

折い

7

ダ

4

h

b

T

バ漫木

"

1 柳魚

画 JII 洋 Þ 選

告爆 b

116

ずヒコーキ折ってやり

七日

 $\widehat{10}$ 50

15難波発

11

:

50

深日港発

12

洲本港着) :

洲本三熊城散策の後

00三熊館着夕食後句

会

女

思

12 届

習

うヒゲを剃

h b

~

け

と鶴

を

折

から

折慕薬折病折折折機折干腹干保病優折思折折折折五 いり b b り月 にの紙出紙紙紙紙睛 をにはのれ ス 見一心の キンシ た 覚 え 用 ップで子に t さら 紙 分かり \$ を 退 教 h

はまだ

母さんになって折り紙好きになり ・機薫風乗せて升 ・機薫風乗せて升 ・大宝の座と ・大宝の座と 空を飛ぶの座に坐わり がて見えがり 急続と え 天優右軒太太 近楼 どんたく 素身郎 春思里悠伶隆雀道紫一一松鐘可 竹福双 月風泉人子声子宏郎風花堂住 水虎 日 折 干ふ折家母 そ折天広原折 麻 紙 折看ピ新無折国千だケ

羽た羽

鶴

女が鶴を

折りり

て鶴

た少女

が命

を

2

ts

3

床勝 b

折り新

指紙

すけり出来

0 b 6 L

話の部屋

作ら 童

折

b

紙

孫

金

魚 折娘 ま

泳 0 3

す窓 つけ

生むだ

が紙指れ

b to 12 9 0 手 折り 1 豆つぶほどの鶴を折り 12 É って 折 のこして子に教 園児はこどもの b いる干 紙 ねている 羽鶴 え 日 柳五 花 花郎

支えの鶴を折りつづけ 癒えきらず鶴を折り が透きとお 役が紙を折り 心を明けれ b 悠み無宵与天保 泉る人明史彦夫 無 月 日

> 深日駅発 15洲本港発 10 :

18:37難波着

17 :

15深日

港着

17 :

36

鳴門観潮と島めぐり(定

期観光

バス) 16 :

10洲本発

16

10

洲本港着

題 4:

人形

憧れ

泊

申込締切 海上観潮 費 六月十日

111,000日 淡路人形劇鑑賞

35名限定 0722 (78) 4706 天笑まで

## 山デカンショ 祭吟行案内

発 合 ます) は各自お求め下さい 乗車券、 九時五十分大阪発福知山行急行 大阪駅中 八月十七日 十八日 央改札前 急行券 午前九時三十分 (新大阪と違 国民宿舎 篠山 泊

b b b 能 b

から

いて

世に問

わ

7

人

形

貧

U

3

埋

8

3

夢

を

3

0

ぼる

b

痺

0

手

8

口

è

使

うて船を折り

人

숲

费

約五千円

懇親宴、

b

が

h

紙

0

折

b

目

12

住んでる几

帳

面

度

出

羽 3 b 中に

里

を欺し え

かばたな

枚ただの一

雀虹

声汀

B

時

八月十七日

\_. 舟 13

紙 b 言

え

恋を鶴に折り

佐智枝

はははる

逝酒

『場で鶴を折る

登美也

集

3

なく

紙紙鶴回紙

のが復の

鳴 門 観 潮 泊吟行

一慶野松原

ず ず ず ず

3 \$

12

女

2

n

ぞれ若やいで

右

近 道

の音色に恋をひそませる

克

課

ほ H

II

す

きを鳴らして磯で母を待ち

ほほほほ

7

鳴

した妻の総入歯

力

す すず

3

17 老

縁

日 6

0

灯を思い

出し

18

ット ベズエ おずきを

鳴らしてはしゃぐ母と子と

おずきにされて「にし」の子鳴いている

おずきを鳴らす母さんなつかしく おずきを不思議がってる都会の子 おずきを上手に鳴らすお婆ちゃん

秀

H

おずきを鳴ら

污濁

の世を知らず

どんたく

住

#### B B B B お

\$

0

花

17

幼い

日がよぎる

史 治替

b

きを盗って追われた頃恋し

阳 季 不

ili お

12

返

りほ を鳴ら

お

ず U 母 L

3

する

ず

4

た頃の

0

ほ

お

ずき

足

止: 淡い恋

まる

お

ず

きを

鳴ら

### I 藤 甲

選

ほ

す

童母縁母母母母母母母 おずきをふくんだ頃をなっ お ず ず ず # 3 3 きを鳴らして妻にある若さ の遊びを知らぬ昭和っ娘 へ祖母は 朱に り明治の 口 少女に返る妻 ずさむ わらべ かしみ 童 軒太楼 登美也 水

> 鬼 実 暖 ほ II ほ ほおずきが朱に熟れ盆がやっ 篤 ti おずきの丸さふくらむおちょぼ口 おずきを上手に鳴らす子 Ŀ アピンでほ をとる海女が海ほおずき鳴らす 想 灯 b 0 ずきが真 出 0 ほ ほ 中 明 おずきい お 7 治 づくほおずき市 ず おずきの は 赤に きの ts 憶 ずき熟れ うこと多く まも話し 熟れた地蔵尊 赤 種さぐり 目 17 えくほ てくる てくる かけ 行ち 甫久路 みの 祥 翁 鮍 本陰棒 伶 3 童 人 17

H H H H ほ おずきも施餓鬼の読経聞いている お お おずきを知らぬ世代はガムを嚙み お ずきにあどけない恋よみがえる ず す 3 # を が 真 口 17 赤 合 12 んで思いごと 熟れた無人駅 素身郎 七 度 面 月

子 江. 近 枝 H ほ お お ず ず 3 \$ 0 の朱に涼 地 丸 2 女の子がほしく 風 が立 ち初め る 可 0 ぼる

H お ず 3 へ朱を吹っ かける秋 0 風

お待ちねがいます。 V おことわり 「中元」 の発表を次号まで 編集部

> 子 兼 定 題 暑い。 十七日午後句会。 自 曲。 選者未定 料 理。

> > 頭。訪

ねる。

申込 X 切 ンショ 七月七日本社句会まで。 八日には で昼食予定。 踊り参加自由。 羽束の湯」又は

(会費別

(鬼遊、

懇親宴。

夜

デカ

宿泊。

翌十

共催 主催 JII 篠 柳 Ш 塔 支 本 部

柳 塔 社常 任 理 事 会 6 4 日

多久志氏が少し体調をくずされ欠席。

同

人

生の句入り、 戸倉普天氏の句集刊行の相談等々、 が5月号で六百号になる。 月七日は路郎先生の13回忌でもあり、機関誌 阪上十止庵氏の逝去が報告された。 来月に持ち越され 旅人 議題は先月からのものであるが、 酒、 (句を刻む)。③テーブル掛け の普及版発行。 形水、 生々庵主幹の染筆)。古方氏から 牧人、 出席 ②尾道の文学の道 この記念事業に① 薫風、 来年 生々庵、 静馬、 いずれも (路郎先 0

を見せてくれることを沢山体験しているから 度に個人差があるにしても、 によく出 催信をもっている。当教室のメンバーに根気 っている。根気さえあ 0 し、ご健吟を祈ることしきりである。 会うが 法を教 か、私は 元 一と言 てく れ n 2 步一 その進歩の速 根気だよーと H か 歩と進境 n る場

(女五十過ぎゆく日日女五十過ぎていく日の) 田 一十過ぎていく日の惜しまれて Iし惜しみせぬ行動力が売れて 惜しみせずコツコツ努力型 捨て明治の目には 17 1 捨て明治は惜しい目で眺 添うて惜し りを to 名残 無駄使 りへ月お 80 15 IF 3 3 日 健 子 堂

手の内の 寄り添うて名残 なく使ってくれ さと惜しさてもでも嫁がせる 十過ぎゆく日日の惜しまれて) 玉と育てて持ってか てくれ る親の金 ます 月お n ぼろ 0 胚 軒 瓢 太楼 子 太

> 斜陽族別れを惜しむ美術品 (黒枠のゆたかなほほ笑み惜しまれる) (焼香の列ながながと惜しまれる) 出し 惜別にテー (惜別の はし惜しみした後味が生臭 骨 惜しみし を切る採 差 董と別れを惜しむ L 0 切れたテー プ切れて霞む岸 たから出した気になれ かれ に大きな 手が いてぶし て老杉 プ へ岸 しみよう 倒さ 握りし 霞 E 11 V む れ 0 る け ず 3 IE 頼 道 功 则 子 次 麓

点の惜敗の重圧嚙みしめる 語将棋惜しや一手を読み違ぇ 将棋一手逃した読み違い 点差の口惜しさ骨までしみ透りの情敗の重圧嚙みしめる 違が前 え 静 俊 泉 風

(詰将

(鳴り止んだ発車のベルへ口惜しがり せた足もう一歩で乗りおくれ 那 智子

急が

会うことがありそうで惜しくない別れ (屹度また会えるよ別れを惜しまない) 柳

惜

惜しまれる頃死春期と思えど 惜しまれて引く人に湧く拍手 (惜しまれて去る花道へ湧く拍手) (惜しまれる頃が死にどきかも れ ず 堂 子:

> 惜春の 惜別の

夜桜無情の雨しきり 余韻テープを握りし

名を惜 (名を 惜しむ人は歩け しむ人にはできぬ惜しいこと Wa 裏街道

一点の差をつ しがらせ け 3 同 洛

酔

しさをファイトに替える子を見

きで正直すぎるを惜

ま

n 7

3

てばやりで惜

しさ忘れは

運

00

し魚やたらに

昭

治

また惜し、国のためて 入院をしてからいのち惜! のため不惜身命の過去を持ち 4 ゃんけん負けとは口 5 惜 1) 柳五郎 同 同ね度

(情別のことばに満場濡れている) ゆく春を惜しんで閑なし養蜂家 橋が抜く黒白惜しむ老いの朝 (惜別のことばに満場濡れて (またしても惜し 敗を綴る子 け た日の インコの声も い遺跡の消える暗い記 寝言口 供の寝言聞 い遺跡の消える記 惜し しめりがち い声である 事 伊津 同 同紘 志

文では告しいとおんな馬鹿にされ (一瞬を惜しみたくなり老いてい 一瞬を惜しむ気持ちで老いは生 3 同道 同藤 夫

女には 再会へ言葉惜しんでいる涙 (再会の 惜しいとおんな馬鹿にさ |涙惜しみなく見せおうて| か

惜しまれてもう涸れたよと振り向 ゆく春を惜 敗の砂 しむ池畔のさかさ藤

血と汗の今日一日を惜しまな 惜しみなく流した今日の血よ汗よ 一と握り甲子園 同同同貞

8 同翁 童

江静無サ保 水枝人ョ夫

いとこでクジの行列断ち切ら

れ

の夜桜雨に濡れて泣く

祐

**—** 50 **—** 

持

惜しまれて去る花道が短かすぎ 焼石に水と知っては惜しい命良心が許さず惜しい椅子を降り スリル追う若さいのちを惜しまない 惜しげなく切ってもつるばら弧を描く 惜しむらくは後でわかったお人柄 弔辞だけ聞けばほんとに惜しい人 けば食えるに惜しい胫かじり しまれて去る汐どきを花に へ車窓が一と役買うている 知る

同幸同同利同茂同慶同 美 美 彦 題

母

七月二十日締切

権高くあたら才色惜しまれる 惜別の涙テープが風に鳴る 残業の続く幾夜か春惜しむ 隙のない身なりに惜しい喋りよう

同同露同

杖

同窓会出席の本社関係の方々は

9月24日~

26日 0

"大陸川柳人》(12回)

(敬称略

(九月号発表) 九一三四

京)。

明(今治)東野大へ(支皇)で一村太茂津(和歌山)西尾栞(八尾)月原宵

菊沢小松園 (大阪) 野

岡山県倉敷市下津井一一 田 恵

本 朗

こと、年々盛会になるようである。 定員制40人が70人にふくれあがっ.所一高知市桂浜・桂浜荘。

雅号ぶっちゃけばなし 150

と御先祖さま二代の芸名のどちらにも「住」の字があ るのを頂戴して可住ともじって改名現在に及ぶ。今だ の広さ深さを知らされて頭の霞みを自覚、そのカスミ 大阪本社の川柳まつりに出席、見事全没。つくづくそ 山の大将ならぬ少尉ぐらいで作家気分に浸る。ある年、 い入門、 聖師に川柳の手ほどきを受けてその人間臭さが性に合 間もなく小西無鬼師から川雑川柳を学び、 お

に自分に納得出来る句が作れずさまよい歩き続けてい

お 40 ま

遠 Щ 可 住

亡妻思う弱さに酒がさめて来る

過ぎた酒天下論じてねむくなり

東京都

池

步

母の知恵坂

車を押す無口

岐阜市

市 かけ たロ L

111

飾

魚

これがまあ一

年生かませ

灰神楽誰がつけたか面白

大洲市

澤

暁

明

מל

す

3

後継者文楽のよさわ

かり

ح

生きている今日が不思議な戦中派 長生きの秘訣に駄目なものばかり 反論のまた反論

へ鳴る入れ歯

ます。

(地方公務員 五十一歳 名で俳句の真似でと。昭和三〇年小畠無

チ

3

ンガ時代二、三年「一雨」という

### 大 萬 JII

## 入選発表

投句総数 七 十 五 百 五 十 五 石 五 十 五 句 **郎** 

驚きの声を残して受話器置く 不幸ならもう驚かぬ馴れている 日日ニュース驚くよりも呆れます 和歌山 松原 大阪晴 寝屋川 小 雄 Ξ 子

泉

驚きが怒りに変る事故現場 北風の強さに驚く下り坂 ひとり居てひとりの音に驚きぬ 和歌山 羽曳野 玄

明

驚いてみるのも恋のテクニック

好きな女居ますと母を驚かせ

泉

驚かすつもりだろうがみな承知

驚いた顔で腹では笑うてる

驚かす涙を妻はためている

祐

どん底に堪えて債鬼に驚かず 二浪目に母驚きもせず無言 青天のへきれき左遷という内示 和歌山 道 富田林 花 古 夫 梢 庵

早熟な娘に驚くことつづき 模造かも知れぬダイヤに驚かぬ 原史好 爺 弥 童 生

めまぐるし驚きばかりの七十坂

34

生

初耳にする驚いた顔つくる

驚かぬ君の根性に驚いた

阪

14

おどろいてばかりも居れぬ物価高

和歌山富

子

西宫

喜代子

大げさに驚く女将の聞き上手

タ

花

どたん場の妻の強さに驚けり

驚きが涙に変り受話器置く

驚いていますと義理を果す文 ピーナツの一粒地球を驚かせ

脱税の額に驚く定期券 喜びが驚きになるプレゼント 大阪道 子

驚いてもおれない明日のある命 驚かしと知っているから乗ってみ また議員かいなと汚職驚かず 岛 根 軒太楼 和歌山 史

春一番もたげた新芽驚かし 驚いた顔にひがみも混ってた 風

酔

驚いた顔して見せる四月馬鹿 驚きが笑顔に変る良い知らせ 潮 花 酒

驚かせてやろうと前ぶれない帰郷 驚いてみせねば孫は承知せず 啓蟄の虫も驚く世の変化 持

怪獣にならされへびに驚かず 雑音になれてか驚かない雀 ますえ 舟

房 驚いている間に追い越す値段表 札束の流れに驚く裏話

八尾鬼 遊 驚いてはおれぬ五ッ児の親 里の母驚かすプランの旅鞄 およよ……驚くギャグで稼いでる 和歌山

人間の願いを神も驚かれ 医科入学又も驚く金の嵩 大阪 あいき

心臓が停止しそうな娘の日記 驚きが嗚咽に変る事故現場 売れ過ぎてたまげましたと鯛焼君 千万子

タバコの火さかさにつけて驚く日 驚いた私がわたし刺しにくる 驚きと怒り故郷の森も消え 神 戸 どんたく

できぶりに驚く嫁で頼りない 驚かさないでとあっさり断られ

驚きのニュースとけしの無表情

友の計に驚く老の坂嶮し 驚かぬようにと焦らすよい知らせ 道

驚くなとことわってから驚かし

驚きもうれしさも疎く老いてゆく

驚 あ 口 のる日ふと戸り か での驚き患者は見逃がさ す 歓喜 の足は 籍で産みの母を 一億円に驚 宙を飛び 奈 良 取 本蔭棒 カン 知り すず K

驚きが顔

いっつ

0

友と遇う

ほんとうに驚いたのは蜂

0

5 いろは

驚きも失せ 74 " 切り 句 0 丰 尾 + 廊 1 " 蔵買

きびし 句 い過去が 岡 ılı あ b 灯

U.

っくりはしたがし

やっくりひど

佳

句

和歌山 としよ

驚くほどの噂でひっそり女住む

大

君

驚

わ 五

少ない

御

14

前

昭和た

和

十一年度 りに

ストテン(五月現在

いたふりでキッスにさから

わ

馬ず

宝

今月は黒字と家計

簿おどろか

せ

東大阪

驚か いてみせて他人の顔 ぬ母に 地 1 プウェイも 句 大 で冷 阪 ない 80 廊方 貞 

111 一三夫著 柳 0 寄 JII 柳寄席 席 校了 to っと墓が出来 送·著者負担 価·二 千 円

田

序文・

田

実

先

牛

発行所

る。ちなみに不二田さんは雑誌「漫才」の編集人でもある。 となみに不二田さんは雑誌「漫才」の編集人でもある。 とのほど単行本「川柳寄席」を出版した。 このほど単行本「川柳寄席」を出版した。 とのほど単行本「川柳寄席」を出版した。 大阪日日新聞―面白く読める「川柳寄席」 大阪日日新聞―面白く読める「川柳寄席」 大阪日田新聞―面白く読める「川柳寄席」 大阪日田新聞―面白く読める「川柳寄席」 大阪日田新聞―面白く読める「川柳寄席」 大阪日田新聞―面白く読める「川柳寄席」

₹544 大阪市生野区 勝山南1-14-17

作 3 (本社でもお取次いたします)

> 教 教

> 客 室

七六五四 三二一〇九八七六五四三二一 多久志江 吸 幸維 道一天牧静富美百花鬼 笑 九 0 七七八 八 八 九 九九九九 九九 4 0 · #1 . H. · 五 £ Ť. · 15. . 五 五 Ŧî, Ŧi. Ŧî. 五

> 堺堺 神 宝 和 1

> > 戸 塚

和歌山

和歌山 富田林

第九回

七月二十

五

B

**宁** 约 593 先 藤井

幽霊」 二三方 堀江 締切 五句以内 緑 町 八月二十 大萬川 柳 Ŧi.

發屋川

10

大

阪阪

華

道 関西

1未生流·

家

元

昭 和 五 + 強 年 締切 七月二-年度第八回

九八 古道洋美 庵子々子 七.0 七.0 t t 0 H.

山尾宮

六・五 七.0 以下 大 和 笠 大 歌山 阪 岡阪政

尼 四 籠 話 宫 崎 市 市 島 北 一五七一一八 武 | 五七-六二三六 | 本七-六二三六 | 本七-六二三六 総 甫

市武庫之荘三丁目 武庫 四 之莊文化会 Ŧi. 104

電話

教

室

尼崎

-53

### 柳 界

#### 稿 締 切 毎 月 末

夏海 日七

柳さっ

夫妻は、 中 Tまで 連 島 日盛況だ 生 阪急百 17 玉 15 庵 2 貨 先生 青 6 店 月 玲 指 7 4 社: 階 H 日 催

> 1 他

1

ル

0

n

他 ネ

反対

は

橋 7

爪 他 0

八嶋濤

明

前

表 5

3 月号)

れ

なドラマ

高

なっ 柳 準三太郎 ル 都 T を 賞受賞作 押す 押すすてし 月 号 賞 他 で 第7 家 公竹路 依怙 表 E 月1 賞 とエ

いいい

か

いち 餓えた手で土

8

んに他

金会 葉

城 日

4

不

凍

後

悔

.

.

あ 開

0 催

1

ス 紐 館 町

津 を歩く 第2 編 なん h 回 7 15 É 8 藤 な 朝 他 加 太 投句 本 7

町

1

噴

柳と なゆき賞発 な 10 3 5 月号 7 50 指

導 柳 柳 53

0

0 煙 21 8

誘 岭 . 6

教本にもなると

板尾

岳

倒さ

ね

ば

主 投 ある生きる 0 部 0 部 0 難 刑 鐘 L 狂い 夫方・ 千石三 の三 111 柳 人協会 五. 東京 の三 都文京 6 倉 弄

まさ こぶし 忌川 石倉幸 切れ 10 は 50 あ 25 ③ 時 0 佈 か 3 から熊本市 b 惠 H 度 第 柳大会が 0 0 役が 子 中 2 py ラ賞 幌都賞 賞が 氏 0 當 1 功 I 疎 あ 8 労 J. から h 発 8 也氏 門七 洋樹氏、 きまっ 坟 伝統文化の 秘奥 八談さ 備北新 高鷲亜 八会から に鈴 紙 氏 氏に れ 木九葉氏、 兵庫県川 発表さ 聞社 鈍氏 た 同 詩人複 高 は 秋山 理 詩 揚 K 事 (藤村 5 長に 集 長と「日 れた。 柳協 と題 月5 眼 氏 保 して 羅 日 付 本

(時代吟) 七谷 2熊 手 世 熊本厚生 . 題 宿場 千円 二本市 H 虹 百 稅 對 版 橋 歩く男 式並 著 m 6 社 月 書 枷 から ますかっ 蕾か がに 号) 目があ 関 流 係で は n 6 記 は 樫谷 念川 風来子 白 T 特 選に 重 第 黒 弾 漫 17 柳 記 3 咲く \$ な 句 8 13 碑 4 気の がら 75 除 峰 0

投

う。 定 価二 0 0 見る + DR 相 7 市 E その " 1 0 橘 H 弓を から 薫 鬼 風

庫 県 ĴΪÌ 柳協会 事 長 0 井不二 橋本衛 役員 一条東 顧 仏氏、 特集。 山上千 氏 JII 5 想 柳 が 本 わ 執 本 社 郎 か

な 社 0 51 筆 雀 関 氏 ま 下され 年 係 0 0 田 一度役員 いでは 追 第 惠 7 悼 38 号は 15 伊藤 記 朗 は 3 合 事 故 を その 四

伊 氏は か 事

12

馬

刊8。 Ш 対流 村祐。 柳俳 行詩 体 理 0 型 研究 異 氏 色誌。 か 季 主

研究大 沙風 祝賀会が 等 實先生 瑞 一会から 宝章 柳 5月 12 は 寄 催 輝 春 28 カン 0 せ 0 れ 叙 夢 たが 7

#### 19 立 近 20 県 唐 並 年 27 記 念

JII 柳 大

兼とと 題ろき 1題(当日発表)、 ・原福祉会館大広間( ・原本・上役・文 ・人形・広場。 領・おとった 顚 り歩 • 5 種分

席 題 分題 各題 2 句 締 切 11

賞会 費 か 20 発位表 は誌を含

句 先 句 宛〒手の3閉市-301 ~7可うcm会長〇分題 は 0 5 JII 4 竹え31の後生賞は 原市投ま箋時は 柳 6 2 ホ市竹原町田 で投句。 で投句。 4 句題と 5 田 5 中 五雅 山 百号を 内 静 記 水 切入

語と笑い」の出版記念とダ 述べられたが、近著「日本 氏は門下を代表して祝辞を 人が集った。不二田 された。 で発売中、 ブル祝賀会となって盛会。 ほか各界から先生ゆかりの (柳人必読の書、 八八〇円 放送、 有名書店 三三夫 出版

▽同人の動向

と、久しぶりにビールを口 月の常任理事会の帰途 間神経痛は快方に向い、 にされた。 ょっとぐらいは良かろう」 ·西尾栞氏 (副主幹) の肋 ち 六

五月常任理事会 ▼若本多久志氏 も体調をくずされたが、 (副理事長 六月句会

は小出智子さんと二か月女 杯を手にされた。 流作家がウーマン・リブぶ 席されたが、見ン事月間賞 久しぶりに六月句会に出 ・岩田美代さん 五月句会 田林市 とう。 ▼堀江芳子さん(島根県

りを発揮されている。三度 回わりをしていますと。 友鶴丸、 目の正直 のところ遠近を問わず、 ▼吉岡逓児氏 叮紅 七月句会は?。 (松江市) 快哉と句会 僚 Z りで申しわけないと思って いますと。

,の東海倶楽部8階で開催

席の予定です。 ら―路郎忌には10名以上 ▼柳楽鶴丸氏 (松江市) か H

す。 りませんが六月中に退院で 黄疸も黄なんて洒落にもな 月1日退職、社会人の仲間 きるのでは一と思っていま からし 野村太茂津氏 りさせて貰いました、 中川晃男氏(松江市) 注意信号は黄で、 (和歌山市 4

なられた。 年記念大会に見事第 ▼嘉数千代香さん は吉永川柳社主催 0 一位に 30周 俱 表された。-

に堂々佳作に入選・おめで オリンピック選手激励標語 · 両川洋々氏 (鳥取 市 は 311 心筋硬塞で死去。 六月二日朝、新大阪病院で 電 柳塔同人多数参列。合掌 阪上十止庵氏

同三日自宅で告別式。

から八木摩天郎居で開催

めし・くすり・花

(本誌な

V

堺川柳会は7月12日6時

んのお世話になることばか れないと大喜びです。 路郎忌句会には正朗が連れ て行っていただけるかも 皆さ 知 20日死去。 かねて入院中だったが6 ▼山田季贊氏 (詳報次号 信△ (高槻市)

います ハワイとは趣が少し異って ぬ胃を恨み一百酒 ·笠原吸江氏(藤井寺市 地中海の空と海は 南欧の情緒に酔え

九州は初めてという妻を連 念に北九州へ来ていますー は長崎から―結婚四十年記 吸江。

之島3の3朝日新聞ビル内 薫風選の電波川柳と共に発 日付の電波新聞へ「変人・ 作家の変人・奇人の話。 波新聞社・川柳係。 一三夫氏は6月 大阪市北区中 川柳・芸能 (俊夫) 壮 9 題五句以内 炎天・積む・席題 約一分。兼題一屋上·星· 近鉄大阪線八尾下車南へ歩 V (土) 午後6時から西郷会 (八尾神社境内) 菜の花句会は-7月10 V

奇人」を執筆。

不二田

▼島居百酒氏 (西宮市) は プ・低い・肉 7 6 V 開催。 時から松崎町三丁目大萬 南大阪川柳会は7月20日 題一記録

語男く か 内市民会館二階第二集会室 時から東大阪市中央公民館 V W で開催。 鳴門観潮吟行 イブル。 川柳東大阪は7月24日 海・呆れる・日帰り。 近鉄永和駅すぐ南 (席題二題 (別掲 6

w デカンショ祭句会

投句先 句宛、 各地の句会 大路美幸宛 裏面に 投句は句箋に 雅号。 で開催 題(各

abl

肉体疲労時·妊娠授乳期 ☆1日、1~4錠を 、1~3回に分けて服用してください。 ☆説明書を よく読んで正しくお使いください。☆25ミリ錠のほかに5ミリ錠

# 本社六月句会

「川柳寄席」出版祝賀記念

会場

金属

館

七日 午後六時

この さんと二人きりなのに煙りのケも立たない。 句集としては珍しいことである。そして一三 えば、一歳の恋人。の恋だけである。 十数年ぶりの披講など会場は賑やかである。 が祝福に馳けつけられ、または一三夫氏が二 会となった。かてて川柳文学社主幹堀口塊人 有志が一三夫氏を激励するなど活気横溢 申しあげたい。そんなわけで薫風編集長はじ 方さんの役どころで二十何年も歩んでこられ 塔のあまり広くない編集室で十年以上も菓子 夫氏ほど浮いた話題のない人も珍しい。川柳 柳話の好郎氏は、まず『川柳寄席』 句集に 柳宏子句会部長以下、編集部と句会部 い仕事を持っているので、恋、など云う 今日は "主役"である。 が本社主催で開かれた。 日川協事務局長の大井正夫先生ほか 一三夫著「川 \*恋\*という字がない、 柳寄席 で苦労さんと 一三夫氏は裏 しいて云 記念祝智 これは から、 の句

> とならんで実に読んで楽しい。 生は男臭く、一三夫氏ならではの句がずらっておれんのかも知れないが、とにかくこの句

男臭さといえば艶歌の北島三郎が、このほど出した曲に、将棋の"歩"をテーマにしたのがある。歩は将棋の世界では最低の"位"だが、敵陣へのり込めば"金"にもなり、歩だが金将にも出世するという。川柳もその意気で勉強すれば………と結ばれた。さすがに柳話の好郎氏である。拍手ではじまり拍手でおわるのが氏の柳話である。第9拍手でおわるのが氏の柳話である。

税〕 堀口 塊人|漫才のとちってみせるほどになり(ほか二

**初電** 

夏の夜を寄席で扇子の風入れる

お囃子が聞こえて来そうページ繰る 高鷲 亜鈍

川柳寄席出版記念句会おめでとう

歩・牧人・維久子・右近・道夫・眉水・瓢太地・牧人・維久子・右近・道夫・眉水・瓢太・群・紫香・潮花・薫風・慶之助・水客・静・大田・紫香・潮花・薫風・慶之助・水客・静・大田・紫香・潮花・薫風・慶之助・水客・静・牧人・維久子・右近・道夫・眉水・瓢太

蘭・一舟・としよ・武雄・静馬・頂留子・

タ花・百酒・千寿子・喜美子・柳宏子・勝晴 ・肖二・綾女・幸生・誓二・つき子・酔升・ 作二郎・吸江・三十四・形水・敏・漫柳 文 作二郎・吸江・三十四・形水・敏・漫柳 文 作二郎・吸江・三十四・形水・敏・漫柳 文 ・八九郎・古啓・あいき・君子・智子・儀 ・・見遊・度・メケ・柳志・悦郎・千梢・寿 ・千万子・弥生・雀踊子・小松園・正夫・栞 ・千万子・弥生・雀踊子・小松園・正夫・栞

席題「大入」 島居 百酒選所々・修史・葉子。

大人りの裏で迷い子が手をやかせ 君子大人りの裏で迷い子が手をやかせ 君子大人りの裏で迷い子が手をやかせ 君子大人りのある大入りを妻にやり 花 相温りのある大入りを裏になって酒 好ば銭にドサ大入りの見染を切り 紫香札止めのビラまでテレビ見せてくれ 多久志大入りの何日か崩れる日の恐怖 美幸大入りの一日をしてるじれている 以九郎大入りの一日をしてるじれている 以九郎大入りの一日をしてるじれている 以九郎大入りで不便な所がひとつ出来 悦 郎大入りで不便な所がひとつ出来 悦 郎大入と云うても四五十人のストリップ 誓二大人人 つろ 日 も 新派 は泣かせてる 道夫大人りで不便な所がひとつ出来 悦 郎大人と云うても四五十人のストリップ 誓二大人人 つろ 日 も 早く なり 柳宏子

出ど坊海出出出出出 大大大大大大大大大大大大大大大夫妻 席入入入入入 んき開番番番番番 入入入入入入入入入入入入方 りをのり り袋りの く待待前ま待 りをり b 5 5 5 12 ~ 題 皆の貯の の舞 を 出つつ真でつ 000 楽半出をながった。 ま 字 袋 で 見 夢 出 ネめ袖 平屋日に税 日顔熱 效 12 みだ 込へ T 7 にが気 ッ ハ窓てけん 南へ方袖役お 13 肩そぞれ トる 砂前名眉 コンビ 務署 7 П から 前残 0 瓜冷さで買やで 人に座門 7 裏男カ 日母 がに居んすっつ飲 7 生待の 座し と揉なの いへに 太 話 チ 征: 0 軽 や見強のかた貰ん が出幕 3 to 借に売組いべ つわ ま角花 4 した赤 元えてくる りて るみ ぎり く陰し週 楽ポ 瘦 簽 番 がボか せか蕾 かえる 15 すのて刊だ去 無屋チ飲 切 し待下 1 す てく付 来る 自 U 字 声 17 裏袋みめ 符 h る汗見誌けに 一牧幸重干寿漫柳 牧あ柳美滋好 静文滋幸花牧悦綾 一与鬼 維 選 舟人生人 志舟史 遊 き志幸雀郎 二步秋雀生梢人郎女 ラ芸親出台出台音出愛出こ出出売出神き初出出出不おせ珈駐出 無の番所番本楽番称番の番番 れ番様っ舞番番番意茶り球在番 番すっ 一様で呼 で呼 で 呼 し方待で待ががすで待辺 っ待 ち台だなま 打 カ h でな 好ん り出といでち のがつ つま気 子つ 0 き代だにほ シらは師事 番言ま喧のしい出待うん曜出が出 ん間 ょ 出符 à まだりには ん嘩出ず 出 打飲なか 6 专 カン 待 出 番ト ト耳へみりし 番待 のにトかに出 17 出せる 番 ツ は 0 ば 動 拍出イ 笑 神 私試込出大 りと - 67 間 番 いた名コンビ を h 入う現てて した次虫 の出番ら の出番ら がまだ明 ح のイ会い呼 母: が ふ仲枚て凧 番 00 待 ま 裁 17 話現 は出 口 長 V 3 ず腰 なる 出世 からし

楽屋裏 3

女松園

出

番

綾小恒与鬼

明史

を

柳

しわ

ず

せれせ

す す 2

遊梢

15

2

干敏儀

返事

寿美子 寿美子

ンレ

~

出

番

音で

投

げ

香

雀

82

が近いたいない

0

W

とり

0

升舟郎

ブー大政出出写

言物治番番真

もの劇待で班

し出出つす来

でに味か

のり鼓番

忘呼

なせ太

をがふがへ

n

てた

水三あ岳鬼

客四き人遊

+37

来る

や番番間

ル

フ

でしていますがうろうろし

君酔一作静形

to

h

to

寄テ真寄悪寄寝高借芸ど一左今空寄催か寄スス度レ打席人席転座金人こと近どっ席促し席」 と近どっ席 金人 レ打席人席転座 ij よりも まし んよがに 3 をピち芸は気 眠 きほをを 0 " 9 題 りあマ さい灯 b のの出 出でに人ひ分 1 13 れコがの寄席出 3 T と団 テ イ角しが若頭 7 はな叙 がもり たら前 0 2 やぞ席 悲頼 る り体寄レ 7: to 動 だがで 财 E 0 U 0 It もさ席 17 もさんは売る 要ら 沙 か かめているまとも からが か座すん席 17 席で っが寄はの なが れ 12 寄席 お客席が す 3 席の 敷 33 阳 よ な 20 顔 席が なでい えにの h 高 3 母い旅 < 12 青揃な年れる T ま 四 なり 13 なまに なり あ 母た 婦 3 空いり L 滋慶水好柳三薫智美綾滋道好生助客郎志四風子幸女雀夫郎 人紫 醉恒柳 被 選

わ

2

T

to

n

3 举屋

2 げ

出出

潮維 F 水 蘭

邪

番

久,稍

ら進

喜多

出か

す

売れ 寄 大 寄席果ててゆるんだ顔を撫でてみ 寄 ジッ 学 席 席 才 芸 h を ち クの 人タレントと言う服に 寄 出 の芸 0 席 く客を落語 T 助手をつとめ 話 前 芸 街は 術 2 すさみ 人 お たし 35 12 b 苦 n 家 視 野 13 を カン す なげく る寄 3 労 12 0 昭 恙 ٤ 和 ち 決 な なり 喜 智 恒 鎮 重 Fj. H 阴 好

変 え 塊 人 向う 更 死 計 向 JII 向 算 0 D 15 ō 0 生 腹 同 向 古 す 10 士今日 ったまに 軒 5 \$ る てて人工芝の は Ì. 12 人 天に向 女が 人 にはでっ 12 0 住 無 顔 h 情 をまだ知ら か で目をさま 15 术 い夢を当て

向 お 5 向 岸 11 12 ٤ 喧 向うのこわさへ牙をとじ あ 嘩 3 から親戚になるお L 幸 T せ お かき 隣 りに喜ば 舞うて わ カン 1 向 b 追 it W 風 b れ 慶之助 栞 水 蘭 干 花 客 梢

つき子 松園 踊子 松園 向 ラ 久 向 女 -5 ٤ L 15 1 23 待 言 ず 側 1 b ね 12 0 向 は 向うも名前 男 女 向 向 13 は 炎 新 0 B 5 雨 聞 T 0 0 女 11> 向 を to 方 待 読 5 0 年 かぶ ic 出 か 0 駆 13 ま 敵 2 け 筋 3 T 30 T から 6 U 通 出 な 11 13 る 3 17 60 3 3 寿 肖 水 美子 夫

向 花

5

か

5

見 結

1: 局

は

h 0

だ

3 77

雀 弥 小

向

5

٤

15 うに

L 私 他

へをとり

戻

0

待

5

千

12

向

5

人

13

to

12 1 12

5

日

0 和陽

を考える

な向 テ

向う

る橋が

向

27

捨

T

10

女

0

仕

返

L

ま 惠 長息

拔 事

it 3 0

3

白 1:

逃

亡

者

風

17

向

元

ば

灯

27

逢

え

3 か

拔

道

を

持 Ut

0 る

答

弁

12

向 男 7

5

志

15 渡 地 解 気 何

5

7

あ

Ifit 田 風 左 過 斜

走

0 な

男 向う

実

12

5

1 牧 牧

非

0

側ば

かり L

陽

が当 話

要

門

3

< 0 5

る

向

5 2

胖

から

痛

<

な

る

向

3

かき

変

0

to

5

17

電

聞

密 12

都

市

向

5

軒 嘘

> E 12

ル 向

ば

か T

岸

を

意

な

人

から

女

連

n

3

久志

ズ 苦

バ 境 町

ネ

か

ま

え

男

0

5

3 h

向う

田

選

向

向

3

濫

は

顔 睨 向

向 出

5

0

村

٤

橋

11

来

向 2 5

け 合

来

嘘

を

お

13

てく から

花

梢 風

向うから

折 T L

れ

T

出るの 真

to

待 向

0

ゆとり

0 題 出 け 待 0 7 3 大 向 島 与 5 宮

夫

15 未

to 知

す 0

6 H

12

車

は

闇

に向

道

作

吸

江 郎

t

£1]

0 h 商 抽

11 路 1 組 朝となる

美子

+ 板 け 隣 7 0 声 から 0 ことを ŧ 拔 け 言 3 登 美

7 か 拔 会 抜 切 を 出 抜 売 抜 輪抜け 12 It U 誰 b け け 67 5 け Na 3 か たとと 1 3 T か T 拔 17 前 3 X T ル 抜 抜 つるチャンス カも け 9 け 風 から 出 H 3 12 無 ると 0 る 3 手: は 抜 来 拔 1 \$ 3 蛸 庶 蜂 覚 U れ 能 前 H プ 悔 9 40 へをねら 毒舌、 1 悟 民 T から ば 悟 12 3 道 から から 出 いる 0 6 0 消 親 朝 0 あ 屋 抜け切ら 輪を抜け えて 来て まだ続 がうま 浮 包 は 古 3 を つってる 気す よう 13 軍 質 出 から 13 悩 いる な 10 2 手. 屋 す L 幸 右 0 太郎 花

路 踊 法

D 0

横 地 b

ようでも 信 6 白 角出 青 步 H 髪 0 歯切れ 女とし 幅 か から 13 す を 5 抜 カン 24 鼻に 崩 け た から さなな から てくる 7 あ む 0 h 勘 文 郎 水 秋

抜

生 抜 け わ 籍 地 窓

4 3

証

拠

L

0

よう

食

戸 露 百 1

人 息 3 け h 抜 様 る位置保っ 30 3 場 0 を 10 g. の出来ぬ 0 け てト て野良犬ほ 日 命 抜 家 一言お " け を留守に 追 ば いてくる 定 0 年 づ す け 前 3 3 与呂志 牧 鬼 水 助

7

7

ガ

を

多世世人中 憧 消 物 新 猫 間 州  $\mathbb{R}$ 元 欲 U 0 界 n h 2 世 0 で 国 0 60 世 世 5 世 は 界 世 初 世 だ で消 世界 界 はじ 5 界 界 め け いなと人間 < 見 精 17 2 えぬ は K 8 3 T 落 から 境 妻 枢 来 杯 ち 火種 6 る 0 0 たように 12 to な で持 2 ささや 広 15 11 人 淋 わる 世界 5 3 6 13 檎 0 思 カン U 6 世 言 世 田 地 10 15 け 15 す 古方選 文 維 塊 好 美 凡 古 曲 久子 九郎 ん手 ÈE 風秋 幸

> そうでっ 世人阿蟛 世世地世 太世 子目 万 世 石 原 を 間 波 界 界 界 陽 界 0 玉 界 は 稿 0 义 史の 閉じてひとり 0 踊 17 E 中 は地 世 旗 石 紙 列 0 5 2 世 b は 义 界 世 デ カン わ 蟻 果 界 べそうで " 世 15 界 思 通 我が 0 干 信 世 15 0 白 サ 界 0 3 世 ~ 世 U は え 界 U 世 家 夜 5 ス 0 2 界 ば T 赤 で 12 か 0 界 0 ٤ ま ル 阿 英 は 太 P 世界に 18 から カン ひよ 0 夜 と聞く 語で 1) 我 番 呆も交ってる 15 陽 れ 好 18 者たらん 水 蜘 家平 地 秩 0 よ 3 3 0 す 笑 かる 図描 蛛 歌手 娼 47 頼り 還 序 3 2 6) りま から 世 和 婦 見 出 見 合 13 歌 言う なり 3 3 5 す 元 h to 維 作 形 美 綾 吸 登 鎮 4 柳 亚 IE. たく 幸 女 夫 江 也 方香 鈍 水

2 出 11 专 せ 題 4 h T Va は 化 な 島 船 船 水 日 粧 巫 生 0 は は 直 椿 夫 線 活 醉 L 3 0 婦 を わ 0 あ 2 7 17 15 漕 11 b 2 船 5 13 豪 0 から 3 0 落 華 待 0 17 連 ち n 船 る 0 lt どんたく 登 風 Ш 祥 美也 選 =

> 笹 プ 别

鑼

6

絀

5

63 遂

愛 艦 to b it 3 W

ラ

モ to 船艘 船

デ 女 七

ル 12 1 か 15

父 吃

から

最 線 水

後 から は は 隷

0

n

水 0 雑 T

あ

h

ま

郎 志

遊船舟

\_

浮

33 0

念

慶之助

から

17

奴

歌 は

生:

b

船

親

子

0

絆

切

n

覧

ヌ

粤 3 0

15 0 流 せ

かい

価世世コ

值界界

観一中

振そみ

しおん

人

12 U 終 0 から 11

用 0 h 世

は

な

にが 破

寿武

世船難出船

な

孤

りん ts

回な お

T

异如何

受

胎 3 数

7 丸 0

か 8 世

6 T 界

天 世 から W

使

7

生

酔 旅

洪

4

0

まで 界に

碰 褄 罰 決

界 恐

出来上が

h

三夫

船

敵

を

持 孫

0

水 薫

客

界

な

E

ID

3

娘

漁船船叱若船夕 波完船 人舵 船 から 渡 5 買 to 見 人 酔 凪 切 敗 0 0 6 御 れ 13 b 15 カ ま T 0 0 0 T 17 0 N 0 0 11 1 b る 片 唄 せ 船でプ 女 海 妻 夢 棒 h してるあ 声 17 を 寝 よ 12 乗 = か ば せ合うて 見 3 船 連 女 b ランを抱 け 0 好 は T 九 b 哀 は 走 4 鱧 3 す る日の 63 から 7 U 15 to 0 の蟻 1: な 船 夜 h 15 母 17 きて 13 1) 0 細 小 を 3 度 0 て 5 造 2 0 年 11 出 < しく 気 3 包 な 期 笛 15 肩 船 3 す 船 7 3 柳 凡 栞 史 美 弥 季 夕 水 塊 九郎 夫 好 生 峰花

老

船 窓

悼

赤 歌

6) は 夏

靴

美

0 0 船

男 追

> 0 風

H 能

あ 17

る 銅

を 欲

堪

かならず原稿用紙に 書。 七字以内の句に、 締切毎月末着便まで。 下三マスに雅号。 ペン書きで文字は 21行以内。

らばれた玉はそ から角 から でき 内海

疑

それからの疑惑へ白

壁おし

しる ガ 凡雀岳小酔史徳鹿幸鶴美弥鬼重 九踊 松 郎子人園々葉次蔵生声幸生遊人 生

付添の

妻が心の初夏を活け

b

花抱いて

マイクへ新人唄い

馴

蜜蜂へここら

汚れていない

歳時記に

逆らう花を売る花屋

なれたパチンコ玉の軽い舞い

世を捨てた人にもあったうら表 うつむいて浪人歩く春の街

吐きすてた言葉を男拾えない

飛んで来る石サ

幟り孫より祖父が嬉しがり

虫

ば男に湧く勇気 鯉は江戸から生きて 繊悔する

鯉の墨絵はうすくする

ガリ版で動き 耳遠

ま

ねき

猫耳は入口

ばかり見る

年頃の悩み知っている石仏 年頃と云うのが娘気に喰わず 年頃と云うのが娘気に喰わず

賽の河原

気がつかず 積んでやり

れる

い羅漢に悲話を告げて去に

動き始めた反対派

来て妻の遠い過

歩くのも月のせいにして二人

長かった道のひととこびがともる場合ない故郷国後に灯がともる

裏表いま

飲む酒はどちらから

玉葱にたっ

ぷり泣いたハンバー

方針の

ない儘

船出し

たニ

知らずに死んだ錦鯉 飼われてやがて

水槽に

すり切れるまで

働いて

0

やかに歩く合

っている 男の

裏に烈しき血

ほめられて手作りですと云いそびれ 生姜手の手作りそれでも 着る度に母手作りにあるぬくみ 民謡となって総立 哀しくもアイヌ 調は 夫の 韶へ祖父の横顔若さも 櫓に民謡力 --う節 ち総踊 1 ヌ 0 粋な味 n 明習う 原み

のる

0

3

楽

Ш

市

井上

Ŧi.

めぐみ

たけ

はずむ胸入れたり出したり包んだり疑惑を招く程でもないが金を貯め疑惑の目そのような気にもさせ 一感背にうけて乱れている歩巾 黙り ひれ可 かい 子住

杜的報 とよ子 喜美代 百合子 10

嫁ぐ日のしたく無口な父となる 一言居士準備万端取りしきる

京

都塔の会

白溪子 紫 替

> 春場所の鷲羽山に花盛り 春ららら失業の身に暗い春 春の風古ネクタイが気にそまず 春の風古ネクタイが気にそまず な値に小さな春がある団地 精進を落し過ごして酔いつぶれ精進を心に定めて継ぐ暖簾精進が限りず涙をまたながし精進が陽の当る日を信じきり間で合図して別れたラッシュのといい。 ラッ うなずいただけでラッシュ 曲 蓮台寺七堂伽藍は花吹雪 蓮台寺善男善女南無阿弥陀 シュ 避け家路と逆に赤のれ つぶれ 0 アワ 0

h

君 S

む

久米雄

元

渦

恒胡夏

洋風彦

1

3

東ねれば並の花まで匂い立ち 中頃の私に出合う古日記 年頃の私に出合う古日記 「緒あるお寺の鐘にある余韻 柳しんぐう 合同句会 津 史 報

定簾照 路月郎恵

栄美子 雀踊 福柳道 水志夫郎郎 寿代

U

3

**—** 60 -

佐加

法の目をくぐりそこねた日の 手錠したまま法廷をにらみつ 孫の守孫に手錠をかけられる 孫の守孫に手錠をかけられる 当時へ再起を誓っている手錠 は一瞬鳴咽する が、馬に虚勢を張っている手錠 共白髪まで愛の手錠をか 良心をもどす手錠に悔け 妻と子を叱り孤独の中に もう許す気へ叱られにや せられたらしい寝顔が泣 でられたらしに来て告げ口 とが口をして来て告げ口 揺する子である 適技する 言っている手錠 まっ 葉が屋に 屋に捨ててある。 をかけてくれる。 をかけている。 をかけている。 をかけている。 をかれる。 をか。 をかれる。 をもな。 を あるっ 11 重 近くなり は 手錠の 行力でいてい 合う 0 0 手 輪 け 錠

肖ニ与よし 寅干小喜太寿き好大佐喜ふ根酔和ま弘功富三 寿 茂 蔵子雪一津子み郎輪子司よ水々子子生 子栄

善人の視野まつ直ぐな道ばかり

をはけても駄目顔色が変ってる

で愛さ晴れる荒れなら知れている

で愛さ晴れる荒れなら知れている

だきに来た岬の波も荒れている

だはけても駄目顔色が変ってる
とばけても駄目顔色が変ってる
とばけても駄目顔色が変ってる
とばけても駄目顔色が変ってる
とばけても駄目顔色が変ってる
とばけても駄目顔色が変ってる
とばけても駄目顔色が変ってる
をはけても駄目顔色が変ってる
はターン出来る土地ありうらやまれせがまれて焼芋の番でリターン

なってが気になり出してリターン

大の元が気になり出してリターン

なっていた

暗号の飛び交う空と見えぬ青

暗号の飛び交う空と見えぬ青

暗号の飛び交う空と見えぬ青 のはのか 6 噴れる荒れなら知れて 脚の視野にある格差 野の高いで片付ける から 関野にある格差

n

3

二彰一栄子四二

干柳文喜鎮弘度右あ季響正好一美 代代 子信子風彦牛 デューキャ

とよ子

と京幸 句祥武 よ子 楽月雄

どんぐり川柳会 谷垣長い長い別れの手紙書く二階 くせのある男の話すぐ曲がり 夕食へ次男は二階から下りず 小心の曲りくねった口説きよう曲るとき蟻 蟻なりに考える こ階借りして金利で食べて居り 口感を聴き 金利で食べて居り のはり早く目が覚め のはり早く目が覚め は 谷垣

3 惠勲喜い真 小 好 鬼 ゆ きを み 大 風 を 砂 園 郎 遊 を 弥

青医勝修君一ど油億色

め

は

集まれば青春がある中二階川柳たけはら ハーン進路さえぎる・イーン進路さえぎる。 ・イーン進路さえぎる・イーン進路されば青春がある中二階 を 春菊の たれの 貧春退 U が院タ 集幾早早十嫁 ど忘れの妻がかえってい春が来る錆びた鎖をみが身にの嫁を迎える陽が温春が来る錆びた鎖をみがあるったがけれど手がある。 一八ですでに一八ですでに一へですでに一 が階橋 できてな ためらう知 にめらう知 わ 0 てくる CK 姑とな た 付 0 H ししめあか 17 h 3

ね 菁政白鬼房静居史サ美粋薫修岳儀 報 居已孤焼子水 好ョ幸々風史人一

#### 地 10 佳 選 (前月号 から

好好

報

綾 雀 踊子

綾

が療 って泣き負けて泣い身 で 凝り 固まっ 身と鉢こ断の即 牙で凝りつく商珍のならぬ 費へ カルテの 空 を買った協いよる商談「 桜 を曳な 雀古薫好 亜也子 めどり 風居子方風 郎園 選

凡人が練 おおさ 指ポキ 少気折取小春年のりりさや どん底を思い挫折を食い止める 生きて行くリズムが狂う不況風 心音のリズム確かに今日がある そのリズム優等生として乗れ 子にかまう忙しさ紅さえ捨て 濡れ髪は衰え知らず湯治の 苦労みな笑い話となって老い b b デル今日自分の好きなおし って待つ 11 ったら落ちる汚れを気にし が振る鈴にバイトの巫女が酔のリズム狂うて赤い旗をふる の野性泪をあらく てニセ金ばかり手に残 合 紙を なポ 話 南 3 3 た日から本当の夫婦 の艶は ダイヤキラキラ嘲笑す 大阪川柳 ポキ鳴らして 0 真 里 れて 祭太鼓に 5 ズム狂うて赤い旗をふる た友というのも 折る手何も ケ 0 た言 倖せ タイヤキ君を笑えない ッなストス 渚年 かいこの汗 マイ 0 カー かな再起の歩 明日を信じてる 葉 会 ~ で子を訓し 0 欲はない ) 闘志覗 一片買 かも 花 スマ 1) 酒が 0 つい 3 イペ ばまし h ば 色 貌 か n + やれ たま ない が好き させる 7 1 かする た # Ç ス 文秋 柳宏子 千万子 君 一かの英不貞 つがで 路子ら詩朽子 花 松園 報 0 風 雀明 晴 ルージュ濃く今一とたびの夢を追い 口先が上手で孤独になっていた ためらいも捨てて唇許す仲 ためらいも捨てて唇許す仲 をか不幸か他人のままで今も居る でが不幸か他人のままで今も居る 1 今日迄は他人が ランプで明日 " 宝の指定を受けて気が 宝と クする部屋 JII 柳わ の母ちい

他人様に見せる自分を置いておく を動かけた恋の扉をまだ叩き 無板叩く人それぞれにある響き をの雷電の直撃地を叩く かけられた謎謎のまま胸におく かけられた謎さの扉をまだ叩き 消えないでおくれロマンの若き 仇敵を許せる平和の日 仇討ち物差しさして寝てし **仇討ち物差しさして寝てしまい** 月世界行けば行ったで謎生まれ 謎ひめたままに別れた日 境の勝気に必みるわらべ唄 ングラスかけて勝気の妻となる する明治は薬草見逃 得ぬ夜汽車の窓に消す名前 ゴムが今日の解答知って居る 歌山 七面句会 0 恵み この演歌 5 筋

也夕夫

三幸報 那智子 与英恒和好凡 まさ枝 喜誉司 千寿子 雀道 としよ 武 福 九郎 雄 彦史子治子郎

れ深寒天郎

鈍行の 頂上は明日かも 凡そ似ぬ夫婦でぴたり呼吸が合 迎え傘無言のままの倦怠期 点字読む指に徴笑むことのあ にぎりに母の味して 西宮北口句 しさ駅毎花盛り の中を ぬ夫婦坂 1 キング 小浜 1

はずみでも金持金を出し惜しみ小はずみだとは云えないとこまで追いこまれ振れた手のはずみが他人にして置かず摩掘の上のはずみでしたと男逃げ宏 三笑子 人報 小松園 一世子 るや子

どたん 素人の芸は 素人の押入れ 素人の目には れたいとしをきっ 川院 駒つな テ 本抜け がない設計 わ 7 から 4 た味 82 売 九

かかや

0 気が疲

れ

儀 あ好

いき

はじ

80

郎

に子供

0

あ

の謎を遊んでる 乗った霊柩車 さな幸と居る

ビを消して子を寝 aピカソ展 らり祝われる 岸 か つ雅綾肖善南とむ風女二信柳 柳報 富 子

宏柳祇恒石茂鎮儀

風明捨子彦一路

更年期二人のはずみ忘れか 母の肩はずみをつけてもみ 素人の商売屋台からの

けほ

ぐし

単刀直入に云えばあんた怒りやすい 単刀直入女社長にある重み 単刀直入だってましたのプロポーズ 単刀直入がキモ抜かれていたベーゼ 単刀直入の手口女サット身をかわし 単刀直入の手口女サット身をかわし 単刀直入の手口女サット身をかわし 単刀直入の手口女サット身をかわし 単刀直入の意見もつれて後よれず 単刀直入へ視線のやりどころ が心をズバリ突かれてうろたえる を心をズバリ突かれてうろたえる 単刀直入へ視線のやりどころ 単刀直入へ記録のやりどころ 信じてた愛の、 だまされてもど い学い生 耳飾りだけは背信知っていた 主役の子血 どこまでつづく黄昏れの 一十中 焼きが 一刀直入の手口女サット身をかわして直入ドキモ抜かれていたベーゼ 焼きを食って歌って気分出し 刀直入へ視線のやりどころ | 刀直入に云えばあんた怒りや南海電鉄川柳部(大阪市)辻 刀直入私 椿ほろり十九の 靴下は息子が先にはいてゆく の白い靴下は 三井が丘川柳会 隅 キングのように中味の見える人 を引くせいかまた主役は他人と思ってず 起良さそう買って見る がひとり いで砂を踏む砂を踏む V ぞくよう桜咲く だまされてもお 1 つらつと 夢を見た ル を軌む音 道をゆ 17 L 博泉報 圭水報 千万子 誓柳儀宏圭摩天 二信一子水郎 〆い総伊半牧 ガス甫升歩人 肖東誓柳儀 婦美子 てまり 柳正綾川 鎮清昌 / 狂子 女

台

所リンゴをむけばリンゴ

中くるうストライ

の命日お経をプレゼント身へ軽い草履のプレゼン

ん困らさ ゼント

れ

プレゼント

新岡

h

和下を脱ぐ終点という我家 大・関れて黙って線路上歩く 負うた幼児の靴下片方なくしてた スト明けの顔には見えぬ切符きり お勝手の窓から明ける妻の朝 ダンディーの気どり靴下気にかかる 亜 ダンディーの気どり靴下気にかかる 亜 があれてるスト中止 から紙の墨流れてるスト中止 から所僅かに朝日差し込んで 古 台所僅かに朝日差し込んで 本 が下の穴から覗く亡妻の顔 地下の穴から覗く亡妻の顔 地下の穴から覗く亡妻の顔 驚きが水平線の世相となり ガダルカナルまだ居る日本丘 真心の指でお新婚の台所な 久し振り会って互に老に驚く聴き上手驚く顔もしてみせる テレビっ子 サラリー かす吉報を持ち弾んでる ・ブリ ント両 に悲鳴をあげる妻でよし で指 川柳会川 一覧く程 来て喜ぶ孫 手に老母着ぶくれて 圧師汗ぼたり にのCM通 ングの得意顔 を切 11 本兵 口地朝

弘生報 亜句 一 炉 幕代子 ますえ <del>=</del> 薫柳 鬼古 亜 12 牧五 生近坊休斉 宏子 也子 松園 チ 子人仏村生子四 方路

酒好きを知られて中元酒ばかり生ア連休遊べと商魂わめき立て生の空へ羽ばたけ干羽鶴年一度酸漿墓場を派手にする 盲娘の 億万長者とは知らなんだベレ突然が突然でない事を知り 突然降ったひよう減収の梨畑 突然の帰国報道陣をさけ紙屑にする広告のビラ哀れ 賄 華燭の灯折目正しい慰斗に映え折り鶴が濡れて悲しい事故現場 ほおずきの友は都会の夜に退官や中元の山夢と消え 彼の妻も昔ほおずき鳴らす 客ち客ちと貯めてはずんだお中元 川柳塔まつえ 一脚とも取れる中元気がひける の感度見事な鶴を折り 一人の顔は自然にまるくなり ぼけな夜だが自然の息吹する 逢ったばかりの友の訃報くる ター 柳倶楽部 部売って億万長者なり 然に戻す大往生 書けず紙屑籠溢

光地 れ 仲 帽

天子報 詳月報 回虹勝桑久春一岩実広照 天 子汀一原隆吉竿光 坊沖 喜代子 ますえ 津 坊沖木

### 暑中 グループをおもちの方も で利用ください。 本誌五分の一段が二千円 広告受付!

★原稿締切・七月七日 二賞発表と同人総会は10 あなたもゼヒ一口

この寸法が四百円 111 柳

会日

場時

七月七日

水

後

六時

属

南

谷

東

町 9

7 鰻

3 之

3 10

5 番

中

振替口座大阪 三三三六八番

九月号発表

(7月15日締

切

18 (不二田宅)

^ 0

同人名簿の本社局番は271

718.32

本社への不急のご用件は、

なるべく書面でお願い

いたし

席

題

当日発表

E

大

峰 路

西菊川若

村

好

本

多

沢

尾

会 費 題

句だけの方は切手百円封入

月3日(日)に

3

兼

題

柳

本社路郎忌

まりました。

ます。午前中と夕刻以後のお電話は06

課 愛 水 111 煙 題 柳 帖 抄 塔 (3句) 10 10 句 IE. III 本 本 村 多 好 水 久 郎 志 客 選 選 選

集

握りめ (各題5句以内) L 植 田 英 あ い 3 選 選

吟

募

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

空 備

旅

恒

選

水 課 愛 111 は楷書で新かなづかいにしてください。★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字 題 煙 柳 新 暴力追放 選 吟 帖 抄 塔 (3句 10 (10句) 各題5 手 刊 句以内) 若 IE. 恒 西 本 木 本 岡 3 Ш, 洛 忠

十月号発表 (8月 15 1締切 久 郎 志

選 選 選 選 選 選 大ぜい困る

-人の遅稿

紅. 酔  $\equiv$ 

発行所 川

柳

社

電話大阪・二七一一三九八五番

报替口座大阪·三三三六八番

昭和五十十 一年分分 定 印 発編 大阪市南区 大阪市南区戲谷中之町二〇番地 郵便番号 刷行集 三百五十円 所人兼 年年 四 二千二百五十円(送料共) 藤 中 干 護谷中之町二〇番地 月二十五日印刷 一百円(送料共) 542 原 島 蓬 童 (送料29円) 太 社 郎

各題三句以内厳守 (今月の出題・合作) 番地 ★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鳗谷中之町20 社 JII 塔

8月の兼題 B 参 ものさし」鈍 感

-64

## .

権す企画がたてイン な。「旅人」の普及版となっ。「旅人」の普及版というのだが、この選が さいうのだが、この選が さいさのでが、この選が まればどうせば、 催誌年 すのの 六路 **企画がたてられて** RE 記 13 年 

どは若い人が 前の。同なガン ろう。 ろえてきて は若い人が主になって、なガンバリが徐々におとの。同人句集。の時のよの。同人句集。の時のようとになるだろうが、 てもらうよう

★大事な原稿を使せんで書 大事な原稿を使せんで書 てちらは通信文と思めだろうが。そのたない。なんど言っ へ事な原 た 温信文と思い。そのた 原 稿 用 紙 いこん のこ

にい文句 な字形 れけて

がが「の関

けでしまう。

なか

いことで、 ることが しま 5 こちらは数で つている あ場 ご迷惑を すると加 が原稿だ かりす の多

東レ株式会社 せ\* 界もおるっても なに出望柳いでい経

Torau

「〇〇が生れた」と、関ってに、小さり、関ってに、小さり 小さなな となり 次第に で仮は **ポ**▼ 1 始 りました。 りました。 りました。 があ でガ JI 1 ルガ 1) ŧ をラ

きたい紙 10 備 いただ

手の

D' から \*

LI

t h

L

る。代であり、原あ時 らだ。 なるか にミッ すとき 関標を した も んがうらい んがうらやましい。屋の間は太陽のもとの菜っ葉のようにグラシがないが、夜になるとガゼンよみがえったようになる。ハダカで徹夜することはたのしい。4時であるともう明かろくなるから、マゴマゴしてわれない、エンジンがかかる、目は生き生としているはずだ。こんな時間のぼくの顔だ。こんな時間のぼくの顔である。 だ。こんな時間のを見てほしいものを見てほしいものを見てほしいものでくは、いるうな顔をしてい りやましい。一切になると 1 から夏はとく 菓子さ つのも 1 で、此い

### 1

走家 めゲスす 力用ナ 日中 日中 でましたり のコーゲー ではばりがあ 邪ブ 版

★川柳家のみなさんは、と ★川柳家のみなさんは、と っくにご存じなので、めっ たに朝の9時や10時に電話 をされないが「漫才」の読 者にはまだ徹底していない のでよく泣かされる。秋田 先生は11時すぎまで寝かせ てくださるが、朝の電話に はネを上げている。ぼくの はネを上げている。ぼくの る人は少ないよう が僧 つとい

(不二田一



いたったらデリカタイ

#### お求めやすい価格で6種類

価格は手軽●サイズは気軽●500mg200mg各赤・「トロゼの合計6タイプと種類は豊富●栓はコルクスクリューのいらないイージーオープンキャップ●しゃれたデキャンタータイプ●中味は人気のベストセラーワイン(デリカ)ー・と、いいことすくめ。

なんと/500ml 赤:自・ロセ 450円。 あらつ/200ml 赤:自・ロセ 200円。

**デリカ・タイム** 

製造・販売 サントリー株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

### 南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉 忘れえぬ はまゆうの宿 政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉 海に浮かぶバラダイス 政府登録国際観光原館 中の鳥

湯峰温泉 一山のいで湯で山菜料理 政府登録国序観光旅館 湯の峯井

和歌山・新和歌浦――海岸美が楽しめる 政府登録国際観光旅館 **萬波**  徳島・鳴門――うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 鳴門

政府登録国際観光旅館鳴門公園ホテル

大阪・泉南淡輪――魚つりに ゴルフに

製光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば――清楚で近代的なホテル ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社 サービスチェーン 大阪案内所 ☎06-631-0222



南油電鉄